

スポーツを大切に思う子どもを育てる指導を求めて

— 「総合運動部」の取組を通して —

子どもの体力・運動能力の低下の問題やスポーツに親しむ子とそうでない子の二極化の問題を解消するために、様々な運動やスポーツを行って、バランスの取れた体の成長を促すとともに、自分の興味・関心にあったスポーツを見つけることができる部活動の取組として“総合運動部”の推進が求められている。

昨年度の研究では、運動やスポーツを「好きだが苦手」と思っている子どもが多いことや、部活動では指導種目の競技経験が少ない指導者が指導する場合が多いことも明らかになり、一生懸命取り組むことの大切さを伝えるために「人を大切にするスポーツ活動」の必要性を提言した。

そこで本研究では、運動やスポーツが得意な子どもと、苦手意識をもつ子どもが、同じ活動の場で「人を大切にするスポーツ活動」を通して共に高め合う部活動を経験し、スポーツを自分にとって大切でかけがえのないものとするためには、どのような点に留意すればよいのかを総合運動部の実践を通して明らかにする。

目 次

はじめに	1	第2節 「人を大切に作るスポーツ活動」の実践	
		(1) ルールを守る	16
		(2) フェアプレー	19
		(3) 最善の努力をする	20
		(4) スポーツから離れたときの態度	23
		(5) 人を尊重する	24
第1章 子どものスポーツをめぐって		第3節 総合運動部の取組から見てきたもの	
第1節 子どものスポーツをめぐるとの課題		(1) 総合運動部のできる活動	26
(1) 子どもの体力・運動能力の低下の問題	1	(2) 多種目を経験するもう一つの意味	27
(2) スポーツを通じた健全育成とは	3	(3) 成果と課題	28
(3) 子どものスポーツ指導の課題	4		
第2節 現状を打開するために小学校部活動 のできること		第4章 生涯スポーツの基礎を育むために	
(1) スポーツは得意な子どもだけのものか	5	第1節 スポーツを大切に思う子どもを育て るために	
(2) 小学生だからこそ経験させたい活動	6	(1) 有能感にかかわる意識	29
(3) 総合運動部に代表される新たな取組	8	(2) 価値を共有する営み	30
		(3) 関係性を構築する営み	31
第2章 総合運動部が目指すもの		第2節 スポーツを通じた健全育成のために	
第1節 なぜ「総合運動部」なのか		(1) 教師としての専門性を生かした指導を	32
(1) 子どもの側からのメリット	9	(2) 社会力を育み子どもに生きる取組を	33
(2) 指導者の側からのメリット	10		
第2節 総合運動部が大切にしたいこと		おわりに	34
(1) スポーツにおける競争をどう考えるか	10		
(2) 人を大切に作るスポーツ活動のために	11		
第3章 総合運動部の実践			
第1節 研究協力校について			
(1) A小学校	14		
(2) B小学校	15		

<研究担当> 和田 英明 (京都市総合教育センター研究課研究員)

<研究協力校> 京都市立朱雀第三小学校
京都市立六原小学校

<研究協力員> 三石 基文 (京都市立朱雀第三小学校教諭)
松本 卓也 (京都市立朱雀第三小学校教諭)
竹原 篤 (京都市立六原小学校教諭)
石原 真理 (京都市立六原小学校教諭)
廣橋 善樹 (京都市立六原小学校教諭)

はじめに

昨年度の調査より、多くの子どもが「真面目にスポーツしたい」と願っていることや、苦手意識をもった子どもが運動・スポーツから遠ざかっていく傾向にあることが明らかになった。

また、部活動では、指導種目の経験がない指導者が40%に上り、不安を感じながら指導に取り組んでいることなども明らかになった。大人と子どもが感じているスポーツ障害についての意識も大きな違いが見られた(1)。

子どもの体力・運動能力の低下や、運動に親しむ子どもとそうでない子どもの二極化傾向の問題を考えると、子どものスポーツ参加の場が、初めから種目の固定した場であったり、競技特性の高い場であったりすると、苦手意識をもつ子どもは特に参加しにくくなることが予想される。また、基礎体力の低い子どもがスポーツ活動の中でスポーツ障害を発症することもみられる。

このような現状から、小学校期の子どもには、運動遊びの充実や調整力を身に付ける発達段階から考えられ、京都市でもすでに取り組みされている「総合運動部」のような活動が是非とも必要であると思われる。そして、限られた部活動の時間とはいえ、その中で得意な子どもも苦手意識をもつ子ども、どの子どもが豊かにスポーツの楽しさを味わうことが、生涯スポーツの基礎を培う上で大切であると考へた。子どもが運動・スポーツを通して心身ともに健康に育つ部活動の取組を探っていきたい。

本研究では、二つの小学校の総合運動部で「人を大切にするスポーツ活動」を実践していく。学校の規模や実態が違う中でも、「人を大切にする雰囲気」でスポーツ活動をすることで、子どもたちが人に支えられたり、人を支えたりする中から「有能感」や「自尊感情」を高め、スポーツや友だち、そこにかかわる全ての人を自分にとって大切に思えるようになる取組を目指したい。

運動遊びの文化が衰退していく中、その再構築も課題であるが、部活動をはじめとする学校や地域のスポーツ活動の中で、スポーツも人も大切に思う子どもを育てていくことが、結果として、体力・運動能力の低下や運動に親しむ子どもとそうでない子どもの二極化傾向などの今日的な課題を解決することにつながることを考へる。

(1) 拙稿「No. 505 スポーツを大切に思う子どもを育てるスポーツ指導を求めて」『平成17年度研究紀要』京都市総合教育センター 2006.3 pp. 165~176

第1章 子どものスポーツをめぐる

第1節 子どものスポーツをめぐる課題

(1) 子どもの体力・運動能力の低下の問題

子どもの体力・運動能力の低下の問題が認識されるようになって久しいが、各報告書は低下の実態を次のように伝えている。

中央教育審議会答申(2002年)では、「文部科学省が昭和39年から行っている『体力・運動能力調査』によると、子どもの体力・運動能力は、調査開始以降昭和50年ごろにかけては、向上傾向が顕著であるが、昭和50年ごろから昭和60年ごろまでは停滞傾向にあり、昭和60年ごろから現在までは低下傾向が続いている」(2)と述べられている。

続けて答申は、子どもの体力・運動能力の低下の実態として、以下の3点を提示している。

- ①親の世代である30年前の調査と比較すると、ほとんどのテスト項目について、子どもの世代が親の世代を下回っている。(図1-1)
- ②運動やスポーツを日常的に行っている者の体力・運動能力は、運動やスポーツを行っていない者を上回っている。(次頁図1-2)
- ③体力・運動能力が高い子どもと低い子どもの格差が広がるとともに、体力・運動能力が低い子どもが増加していること。

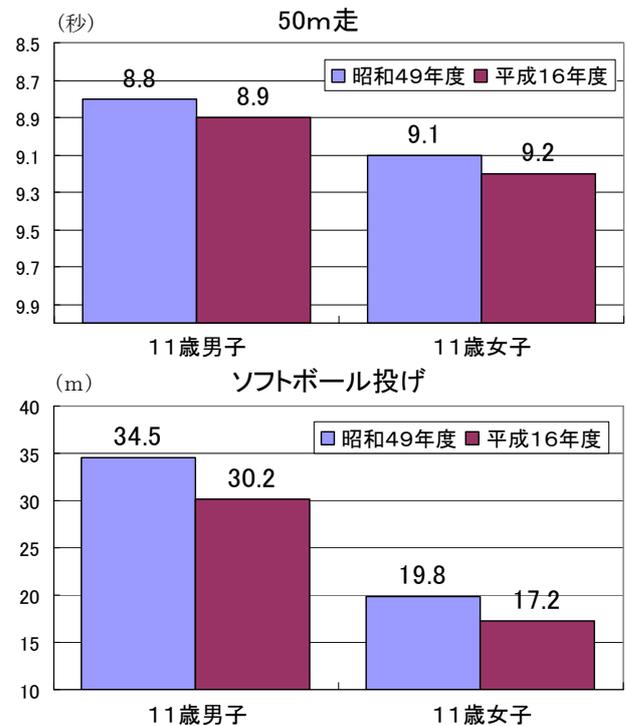


図1-1 子どもの運動能力30年前との比較

『平成16年度体力・運動能力調査報告書』文部科学省 2005.10より作成

そして「このことはスポーツ少年団や部活動などで運動をよくする子どもとほとんどしない子どもとの二極化傾向が指摘されていることと無縁ではないと思われる」(3)と報告されている。

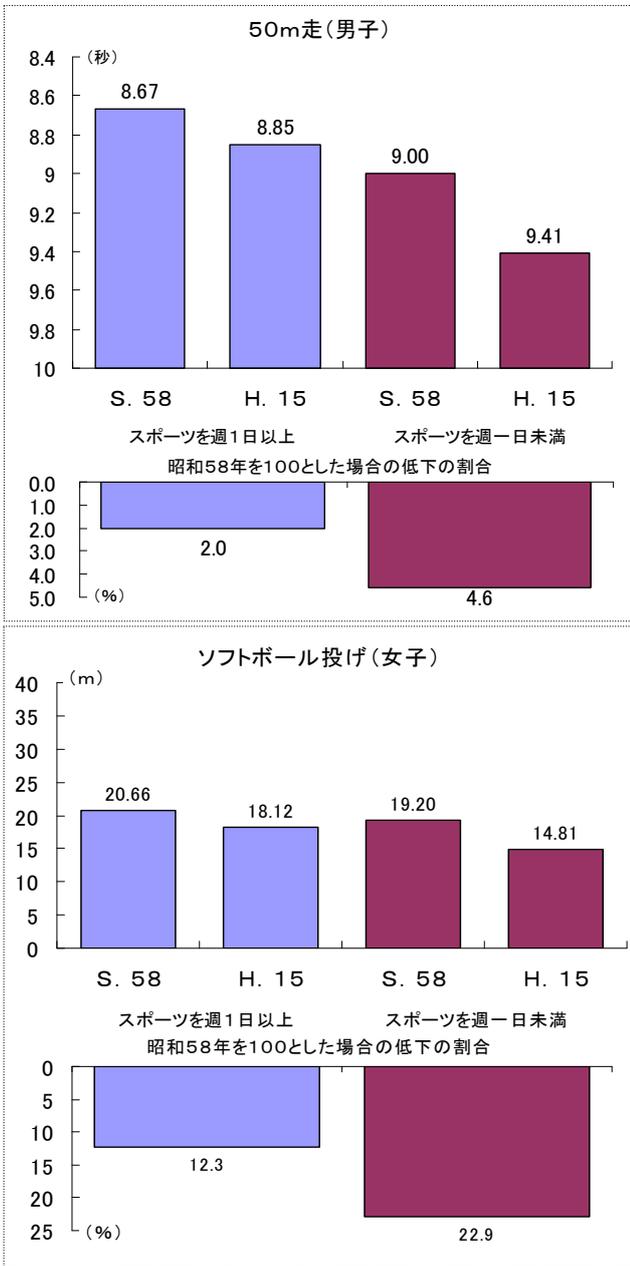


図1-2 スポーツの実施頻度別運動能力の20年前との比較
『平成15年度体力・運動能力調査報告書』文部科学省 2004.10より作成

2004年1月に出了た中央教育審議会『子どもの体力向上のための総合的な方策について』の答申の概要によると、「昭和60年ごろから子どもの体力・運動能力の低下傾向が続くとともに、肥満傾向の割合が増加し、将来の生活習慣病への危険性が高まっている」(4)という。

さらに、身長、体重など子どもの体格は向上しており、「体格が向上しているにもかかわらず、体

力・運動能力が低下していることは、体力の低下が深刻な状況であることを示している」(5)と指摘している。

文部科学省の『平成16年度体力・運動能力調査報告書』によると、長期的に年次変化の比較が可能な基礎的運動能力としてみた走(50m走・持久走)、跳(立ち幅跳び)、投(ソフトボール投げまたはハンドボール投げ)の各能力、並びに握力の年次推移は、「長期的にみると、ほとんどの年齢段階でいずれの基礎的運動能力及び握力も引き続き低い水準にある」(6)と報告されている。

次に京都市の実態をみる。京都市教育委員会の『平成17年度新体力テスト結果報告書』によると、「京都市の児童の体力・運動能力の現状はかなり厳しいレベルにあるといわざるをえない」(7)とまとめられている。

平成17年度は、男子で2学年、女子で1学年がすべての種目において全国平均を下回っている。男女とも「握力」「反復横とび」「シャトルラン」については、すべての学年で全国平均値を下回り、男子は「50m走」「立ち幅跳び」も全ての学年で全国平均値を下回っている。

過去10年間の推移をみると、5年生で際立って低下しているのは男女とも「握力」である。(図1-3)

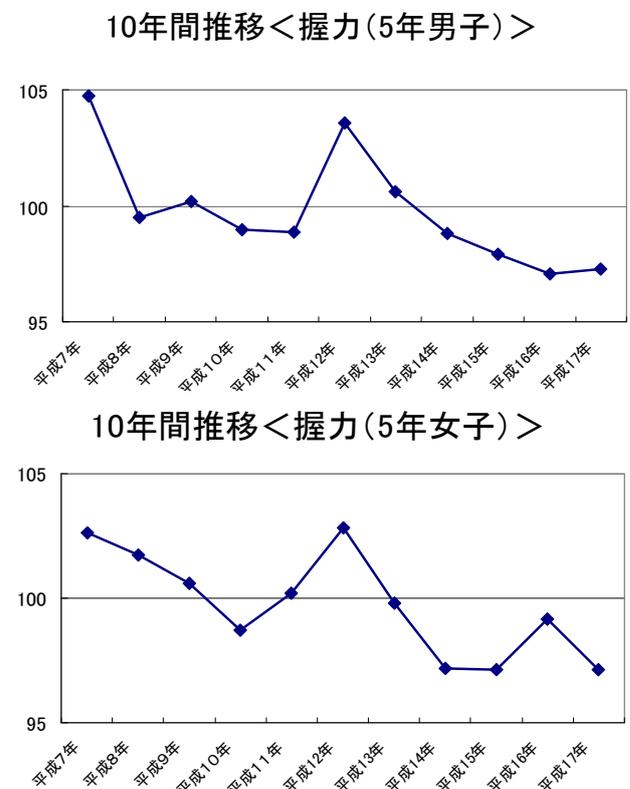


図1-3 京都市立小学校5年生過去10年間の握力の推移
『平成17年度新体力テスト結果報告書』京都市教育委員会2006. 3より作成

運動部活動所属による比較では、京都市でも「運動部所属者は未所属者より体力・運動能力で明らかに高い水準にあるということがわかる」(8)と述べられている。

また、昨年度実施した意識調査では、統計上の数値に表れた低下の実態だけではなく、子どものスポーツ活動にかかわる指導者の60%以上が子どもの体力・運動能力の低下を実感していることもわかる(図1-4)。スポーツ活動に参加していない子どもも含めた様子を聞けば、さらに低下を感じる比率が高くなると思われる(9)。

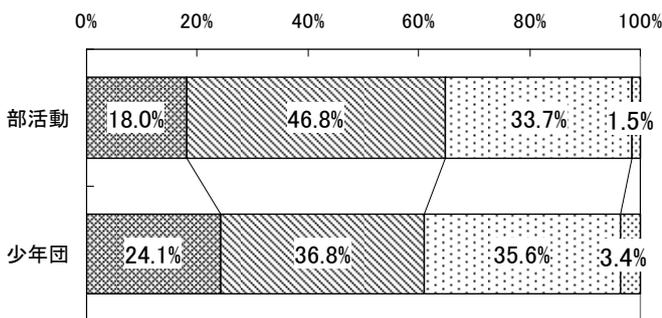


図1-4 子どもの体力低下を認識しているか (n=292)
 拙稿「No.505スポーツを大切に思う子どもを育てるスポーツ指導を求めて」『平成17年度研究紀要』京都市総合教育センター 2006.3

続いて「低下したとを感じる体力要素」についての設問に対する自由記述の回答では、最も多かったカテゴリーが「持久力」であったが、精神的な持久力や気力の低下にかかわる記述が多く見られ、「指導者が低下していると感じている内容は『体力』だけではなく、『心の持久力』と深い関連性をもつ」(10)と考えられる。

このことについては『子どもの体力向上のための総合的な方策について』の答申の中でも、「運動不足や不適切な生活習慣は、単に運動面にとどまらず、肥満や生活習慣病などの健康面、意欲や気力の低下といった精神面など、子どもが『生きる力』を身に付ける上で悪影響を及ぼす」(11)と指摘されている。

意欲や気力は動機づけの正の方向性やその保持に関連すると考えられる。その阻害要因として長沼は「有能感や自己決定感の欠如である」(12)と指摘しており、子どものスポーツ指導においても重要な視点であるため後述する。

以上のような調査結果などから子どもの体力・運動能力の低下の現状と課題を整理すると、図1-5のようになる。

特に運動やスポーツから遠ざかっている子ど

もがいかに運動やスポーツを自分の生活に取り入れた生活を営む能力を高めていくかが大きな課題であるといえる。

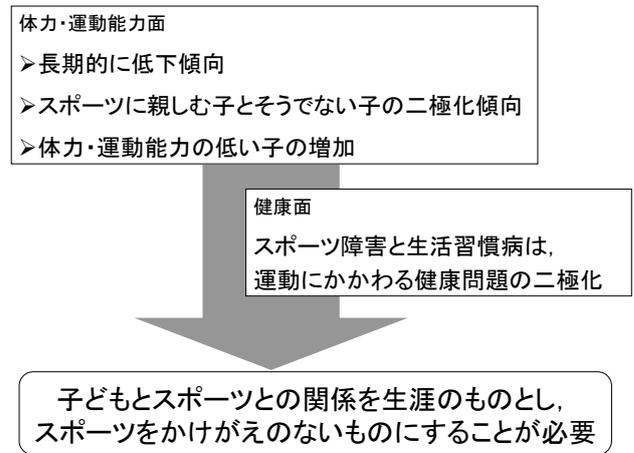


図1-5 現状と課題

(2) スポーツを通じた健全育成とは

子どもにスポーツをさせることの教育的な意味は何か。スポーツを通じた子どもの健全育成とは何か。スポーツを通して子どもにどのような力をつけることが求められているのか考えてみる。

日本スポーツ少年団ではスポーツを通じた子どもの「育成の意義」として、「スポーツ少年団は、スポーツを通じた青少年の教育の場である」(13)と考えている。そしてスポーツによる教育の有効性について、「人が集まることで、相互作用の教育が生まれます。そこにスポーツを取り入れることで、身体的効果を上げるばかりでなく、さらに人間性を磨く複雑な相互作用が働いて、より深い人間形成が進められるのです」(14)としている。

保健体育審議会の答申では「スポーツの意義」の項で、「スポーツは、人間の体を動かすという本源的な欲求にこたえとともに、爽快感、達成感、他者との連帯感等の精神的充足や楽しさ、喜びを与え、また、健康の保持増進、体力の向上のみならず、とりわけ青少年にとっては、スポーツが人間形成に多大な影響を与えるなど、心身の両面にわたる健全な発達に資するものである」(15)と述べられている。

スポーツをすることで体力が向上するだけでなく、精神的充足が得られるとともに人間形成への大きな影響があるとして、ここでも心と体の両面の発達に有効であることが強調されている。

ここでいう心の面の発達とは具体的にどのようなものなのか。いくつかの文献の記述からみる。

文部科学省の『子どもの体力向上のための総合的な方策について』の答申では、「運動部活動は子どもの体力向上に有効であることに加え、**子どもの自主性や協調性、克己心、フェアプレーの精神を育む**など教育的効果も大きく、より多くの児童生徒が自ら意欲的に興味・関心のあるスポーツに取り組めるよう充実を図る必要がある」(16)と心身両面の効果について触れている。

『小学校学習指導要領』には体育科の目標として次のように書かれている。

体育科の目標

心と体を一体としてとらえ、適切な運動の経験と健康・安全についての理解を通して、運動に親しむ資質や能力を育てるとともに、健康の保持増進と体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる。(17)

平成10年12月に改訂された現行の学習指導要領では、子どもの心身ともに健全な発育・発達を促すには「**心と体を一体としてとらえ**」た指導が重要であることを強調している。ここでは、「特に心の健康が運動と密接に関連していることなどを理解することの大切さ」(18)を示している。

また、「運動に親しむ資質や能力」については「運動への関心や自ら運動をする意欲、仲間と仲良く運動すること、各種の運動の楽しさや喜びを味わえるよう自ら考えたり、工夫したりする力、運動の技能などを指している」(19)としている。これらの資質や能力を育てるために、子どもの能力・適性、興味・関心に応じた「適切な運動の経験」を通して、運動の楽しさや喜びを味わい、自ら考えたり工夫したりしながら運動の課題を解決するなどの学習が重要になる。

「楽しく明るい生活を営む態度を育てる」ことは体育科の究極的な目標である。「生涯にわたって運動やスポーツを豊かに実践するための資質や能力、健康で安全な生活を営む実践力及びたくましい心身を育てることによって、**現在及び将来とも楽しく明るい生活を営むための基礎づくり**を目指している」(20)のであって、このことが体育・スポーツを通した子どもの健全育成の姿であると考えられる。

昨年度の調査では、指導者がスポーツを通して子どもに何を伝えたいと考えているのかについても調べた。図1-6は部活動とスポーツ少年団の指導者が、子どもに伝えたいと強く考えている選択肢を、支持の多い順に四つずつ抜き出してそのキー

ワードを元に整理したものである。

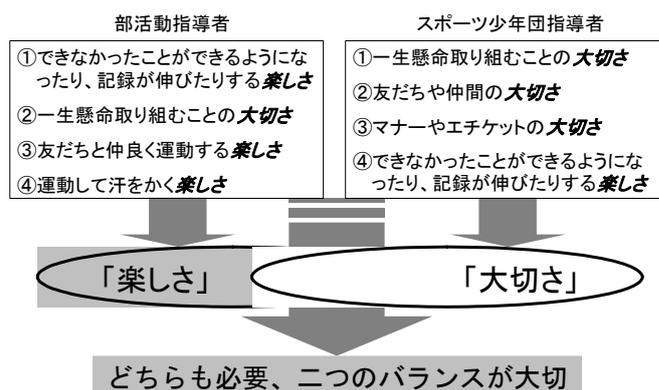


図1-6 スポーツを通して子どもたちに伝えたいこと

その結果指導者全体としては「一生懸命取り組むことの大切さ」を伝えたいと考えているが、部活動の指導者は「楽しさ」を、スポーツ少年団の指導者は「大切さ」を伝えたいと考えている割合が高いことがわかった。

スポーツ活動の中で、子どもにこの「楽しさ」と「大切さ」をバランスよく伝えていくことを大切にしたい。それができれば、スポーツの過程や結果、人とのかかわりの全てを通して、子どもは“有能感”や“自己肯定感”をもつことができると考えた。そこで、筆者は報告書の中で「“自己肯定感”をもつ子どもは、自分の大切さを知っている。自分を大切にできる子どもは、人も大切にすることができる。そのような子どもが社会へ出て行くとき、日本は『誰もが住みやすい国』になっていくはずである。これこそが『スポーツを通した健全育成』の目的が達成された姿ではないだろうか」(21)と提案した。

(3) 子どものスポーツ指導の課題

心身両面にわたる健全な発達を目指して行われている子どものスポーツ活動であるが、課題とされていることも多い。ここでは指導のあり方について現在課題とされている内容を挙げる。

- 生活環境の変化に伴い、屋内でのひとり遊びの比重が高まり、仲間や異年齢集団との身体活動を伴う運動遊びが減少し、体力の低下が危惧されるとともに、スポーツに親しむ機会も不足してきている。なお、児童期のスポーツ活動の中には、練習のし過ぎや特定の種目への早期専門化の問題も指摘されている(22)。

- ・ 地域におけるスポーツ指導者については、子どもの発達段階に応じた指導方法を心得ている指導者が少なく、いきなり技術的なことを教えたり、勝ちにこだわった指導をして、子どもがスポーツの楽しさを知ることなくやめていく場合もあり、スポーツ嫌いになるとの指摘もある(23)。
- ・ 残念なことに、一般の指導者の中には少年・少女たちにとって至上のメリットであるはずの人間形成を容易にメリットとして受け入れられず、その場の勝利だけを求めようとし、しかもそのことが逆に最大のメリットであるかのよう錯覚してしまう人も少なくありません。それはまさに、少年・少女たちの発育発達を損なう指導者自身の利己的で無知な判断にすぎません(24)。
- ・ 少年スポーツの活動内容の競技化、専門化が著しく進んでしまった結果、そうした環境に適応できる運動能力に優れた子どもは体力を伸ばしているものの、そうではない子どもは早々とスポーツをする機会を失ってしまい、年々、体力を低下させていると推測できる(中略)専門化しすぎた少年スポーツが子どもの体力の二極分化という現象を助長する原因になっている(中略)現在では少数の子どもだけがスポーツをして体を鍛えるチャンスに恵まれ、多くの子どもはそのチャンスを奪われるという状況が進行している(25)。
- ・ 子どもの運動やスポーツについて「運動不足」と全く逆の「運動やスポーツのやり過ぎ」によるスポーツ障害が多発していることが危惧されている。スポーツ障害にはさまざまな障害がある。成人と同様に子どもにも整形外科的スポーツ障害が多くみられるが、その他に内科的スポーツ障害、精神科的スポーツ障害、眼科的スポーツ障害、耳鼻科的スポーツ障害などさまざまなスポーツ障害が起きている(26)。

これらはおよそ次の三点に集約される。

- 1 勝利至上主義の指導による弊害
- 2 発達段階に合わない早期の専門化
- 3 スポーツ障害の多発

しかし、これらの課題は昨年度の調査からみえた子どもの意識とは食い違っている。子どもが指導者に求めていることは、達成・競争・克服の楽しさであり、「もっとスポーツをしたい」「真面目にスポーツをしたい」(27)というものであった。

それとともに子どもたちは「スポーツに集中できる環境を求めている。そのための『厳しさ』を指導者に求めている」(28)ことが明らかになった。

「できなかったことができるようになりたい」と願う子どもは「もっとしっかり教えてほしい」と訴え、自己主張の強い友だちやわがままな友だちがいても楽しくスポーツできるように「間違っていたり、ふざけていたりしたら指導してほしい」などの思いで『厳しく』と言う言葉を使っていると考えられる。

指導者には、自分がかかわる子どものスポーツの場が「スポーツに集中できる環境」になっているかどうか振り返ることが求められている。

第2節 現状を打開するために小学校部活動でできること

(1) スポーツは得意な子どもだけのものか

子どものスポーツをめぐる一般的にいわれる問題の中で、次の二点は競技性の高い指導を行っているスポーツ団体のものであることが多い。

- ・ 一部に子どもの心身の発育発達を損なうような指導の現状がある。
- ・ スポーツ障害を起こす子どもが増えている。

子どもたちの体力・運動能力の低下の問題やスポーツに親しむ子とそうでない子の二極化傾向が進んでいる現状は、そのような団体に属さない子どもたちの問題と捉えて考えたい。

しかし、最近では集団での外遊びの機会が減り、子どもがスポーツをしたいと思ったときに、競技性の高い団体に所属しなければならない現状がある。そのような団体に属さない子どもが、スポーツを楽しむ場がもっと保障されなくてはならないのではないか。

次頁図1-7は昨年度の意識調査結果から、「スポーツや運動が得意か」の設問と「スポーツの楽しさ」の設問をクロス集計したものである。「そう思う」と「まあそう思う」を自分はスポーツが得意であると意識している子ども、「あまり思わない」と「思わない」を運動・スポーツに苦手意識をもつ子どもとして考えてみる。

昨年度の研究で述べたように、得意な子どもも苦手意識をもつ子どもも、達成や競争のスポーツの楽しさを求めているといえるが、もう少し詳しくクロス集計をみると、苦手意識をもつ子どもは、得意な子どもに比べて、「できなかったこと

ができるようになりたい」気持ちが強く、競争や勝負に対しては控えめであることがわかった。

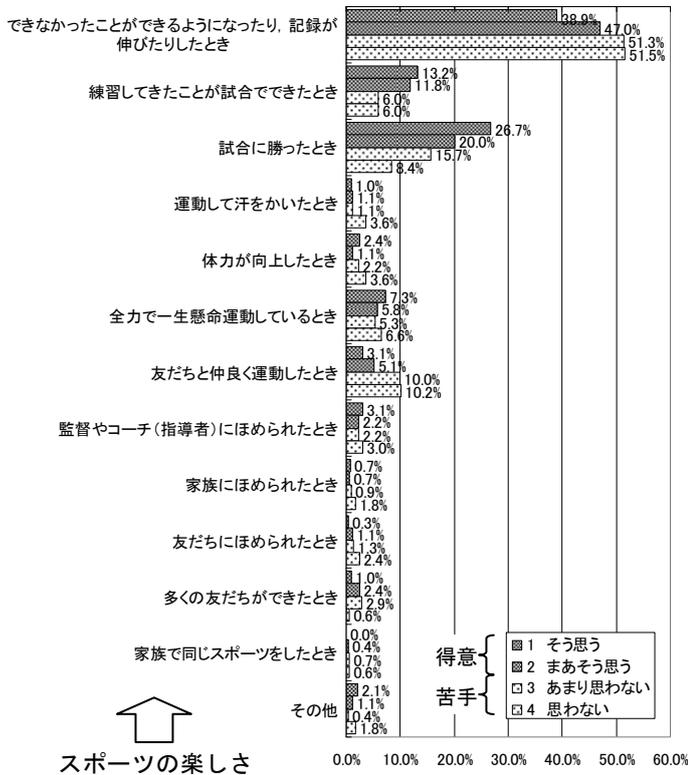


図1-7 「スポーツの得意さ」と「スポーツの楽しさ」のクロス集計

また、「友だちと仲良く運動したとき」に楽しいと感じる子どもも多い。これは苦手意識をもつ子どもが、現在までの運動経験の中で、失敗を責められたり、笑われたり、自分がチームの負けの原因になったと感じたりすることで、人間関係を気にすることなく運動やスポーツをしたいと考えるようになってきているためではないかと思える。

スポーツから遠ざかっている子どもや苦手意識をもつ子どもの中には、スポーツは「好きだけど、苦手」(29)という意識をもつ子どもが多い。小学校の部活動では、そのような子どもにこそ「スポーツの楽しさ」を味わえるようなスポーツ活動を用意しなければならない。小学生のスポーツ活動は一部の運動能力が高い子どもだけのための活動であってはならない。

しかし、一般的にいわれる勝利至上主義の指導だけを問題にしてはいけな。確かに、勝利至上主義の活動の場では、運動能力が未開発の子どもや遠慮がちな子どもは、活躍の場が限られる結果、スポーツから遠ざかってしまったり、我慢を続けなければならないかたたりすることになる。

一方、勝つことだけを目標にせず楽しめたら

よいという活動もある。ただし、子どもに対して放任になり過ぎると、ここでも運動能力の高い子どもや自己主張の強い子どもとそうでない子どもの活動量や活動時間に差が出てしまう。なぜなら「少年スポーツとは、生まれつき速筋が多い子どもが活躍できるようにできている場」(30)であるという側面があるからである。

勝利至上主義であろうとなかろうと、指導の仕方によっては運動やスポーツに苦手意識をもつ子どもは精神的にも阻害され、スポーツの現場から遠ざかることになる。

(2) 小学生だからこそ経験させたい活動

ア 「体力・運動能力の向上」にかかわって

小学生の発育発達段階に合った運動・スポーツ活動を考える。杓子によると「一般に、『発育』とは形態の増大を意味し、『発達』とは機能の増大を意味」(31)するが、ここでは、発育と発達を分けてその特徴をみている。

スキヤモンの発育曲線によると、「4つの型の中で最も発育が速いものは、神経系で(中略)図でわかるように神経系は8歳頃にすでにほとんど完成してしまう」(32)とされている。(図1-8)

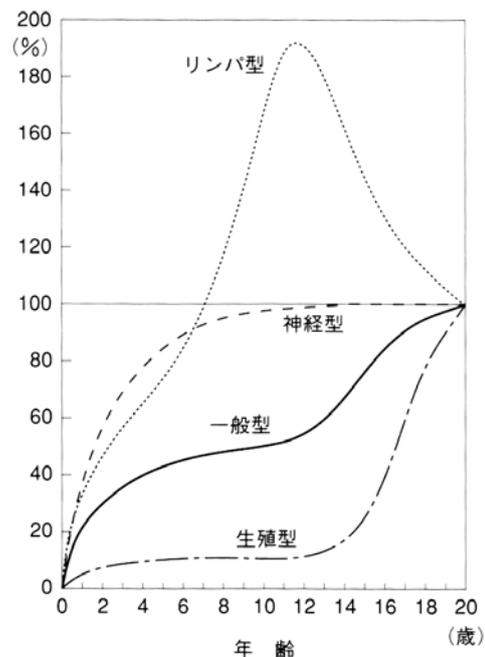


図1-8 スキヤモンの発育曲線

武藤芳照「スポーツ医学からみた年代別・性別スポーツ指導」文光堂

もう一点、発育について注目すべきことは個人差である。次頁図1-9は男子の身長の間年増加量の個人差を表したものである。

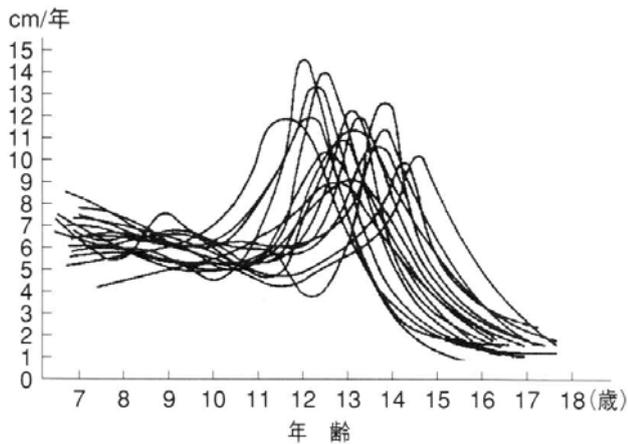


図1-9 身長が発育速度(年間増加量)の個人差
高石昌弘・宮下充正「スポーツと年齢」大修館書店

深代は「年間発育量がピークに達する年齢は、早い子で12歳、遅い子で15歳と約3年もの開きがある。また、ピーク値も8cmから14cmと差がある」(33)と述べていることから、スポーツの指導に当たって、特に小学校高学年からは発育の面で非常に個人差の大きい時期であることに配慮することが必要であると考えられる。

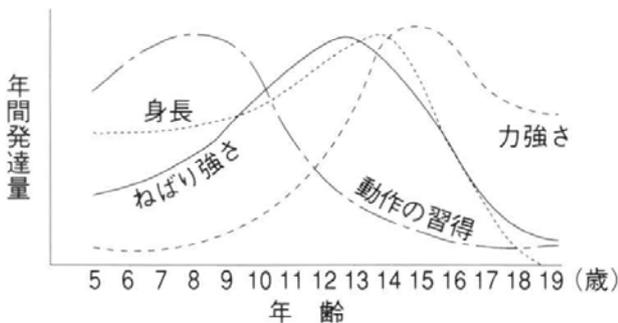


図1-10 体力・運動能力はいつ発達するか
宮下充正「子どものからだ」東京大学出版会

体力・運動能力(発達)は体格(発育)の影響を受けるが、トレーニングによってかなり高められる可能性がある。発育段階に応じたトレーニングについては「発育期において、身体各機能が最も発達する時期に合わせて、その機能を向上するようなトレーニングを行うことが最も効果的である」(34)といわれている。

図1-10は、年間発達量を「動作の習得」「ねばり強さ」「力強さ」の3つの観点から調べ、「身長」の年間発達量と比べたものである。

発達のピークは「動作の習得」「ねばり強さ」「力強さ」の順にみられる。このことから壘子は「11歳以下では『上手になること』(神経・筋系)、

12~14歳では『ねばり強くなること』(筋・呼吸循環系)、15~18歳では『力強くなること』(筋・骨格系)に主眼をおいてトレーニングするのがよいことがわかる」(35)と述べている。

スポーツをすると体と心が鍛えられるから成長期の子どもにはスポーツを経験させたいと考える保護者や教職員は多いであろうが、発達的面から考えると、児童期は神経系が発達する時期であり、体を操作する能力である調整力や巧緻性を高める運動やスポーツに多く取り組むことが求められ、高学年になって持続的な運動やスポーツを取り入れていくことが望ましいといえる。

イ 「運動に親しむ資質や能力」にかかわって

第1節第1項でみたように「運動に親しむ資質や能力」とは「運動への関心や自ら運動をする意欲、仲間と仲良く運動すること、各種の運動の楽しさや喜びを味わえるよう自ら考えたり、工夫したりする力、運動の技能などを指している」(19)としている。

「仲間と仲良く運動すること」については第2節第1項で述べたように、苦手意識をもつ子どもほど「スポーツの楽しさ」としてより強く求めている割合が高い。うまく運動できないことが多かったり、自分の失敗が友だちに迷惑をかけたりしているのではないかと遠慮する気持ちがみられる。得意な子どもにとっても苦手意識をもつ子の気持ちを理解することで、自分自身も、より真剣に積極的になれるはずである。これは「共生」の視点といえる。

「共生」とは本来生物学や生態学で用いられてきた概念で、岩波の生物学辞典では「異種の生物と一緒に生活している現象を一般に指す。ただし、互いに行動的あるいは生理的に緊密な結びつきを定常的に保っていることを意味する」(36)とされ、井上は「他の種がこの関係に参入する可能性はないという安定した閉鎖系(共棲=symbiosis)」(37)として説明した上で、社会学的に「異質なものにも開かれた社会的結合様式(共生=conviviality)としての視点」(38)の重要性を指摘している。

細江はそこでは「生の形式を異にする人々の活動と参加の機会を承認し、積極的に関係を作り上げようとする開かれた生き方(結合様式)が提示されて」(39)いるとしている。子どもたちの集団においては後者の「共生」の視点が重要であると考える。

本研究においても、「共生」を「異なる個を認

めながら、全体の組織も相互にうまく成り立つように相互の関係を図っていくこと」(40)と捉え、スポーツに対して異なる経験、異なる能力と異なる意識をもつ子どもたちが、小学校の部活動という同じ活動の場で、互いを知り、互いに尊重して認め合い、互いに高め合えるような「共生」の視点を大切にしつつ、子どもたちが「自己実現」を図っていけるスポーツ活動を求めていきたい。

昨年度の研究では、意欲につながる視点として「有能感」をあげた。子どもが運動・スポーツを通して「やればできる」気持ちをもつことで「その後の運動に取り組む態度や姿勢につながり、生涯スポーツへと発展していくことになる」(41)からである。特に苦手意識をもつ子どもを自ら運動やスポーツに向かわせるには、「有能感」をもたせることが欠かせない条件になる。

また、仲間との相互作用でさらにスポーツに熱中できるようにするために、スポーツマンシップに代表される『人を大切にするスポーツ活動』(42)を提案した。子どもと指導者の意識調査から、「子どもがスポーツに集中できる環境」を保障するためにも本来スポーツの内容に含まれる「スポーツマンシップ」「マナー」「エチケット」というものを、子どものスポーツだからこそ、特に大切に伝えていきたいと考えたからである。

『人を大切にするスポーツ活動』を経験することで、子どもはスポーツの過程や結果、人とのかわりの全てを通して“有能感”をもつ。それはやがて“自己肯定感”に高まることが期待される。

その中で、「子どもはスポーツをすることの意味を知り、スポーツが自分にとってかけがえのないものになるはずである」(43)と考えた。

「楽しく明るい生活を営む態度を育てる」という体育科の究極的な目標もその過程で達成できるものといえる。

(3) 総合運動部に代表される新たな取組

子どもの体力・運動能力の低下の問題を解消するために、中央教育審議会『子どもの体力向上のための総合的な方策について』の答申において、「子どもが興味・関心に応じて多様なスポーツができるよう、複数の種目に取り組むことができる総合運動部の推進を図ることが重要である」(44)と述べられている。

この総合運動部は、「特に小学校段階では、いろいろなスポーツを行って、筋力などのバランスの取れた体の成長を促すとともに、自分にあつた

スポーツを見つけることができることから意義が大きい」(45)とされる。

京都市においても、近年いくつかの学校で総合運動部の取組が試行され始めている。また、総合運動部という名称は使用していなくても、子どもが多種目に参加したり、自分の予定に合わせて、参加する日を選んだりすることができる取組もみられる(46)。

これらの取組は、いずれも学校として全ての子どもがスポーツの入り口に立ちやすくするための工夫である。第2節第2項のアに述べた子どもの発育発達の段階と最近の子どもたちの生活の変化を考慮した取組でもある。

本研究では、このような“総合運動部”を通して子どものスポーツ活動について考えていきたい。次章ではさらに総合運動部の取組について触れていく。

- (2) 『子どもの体力向上のための総合的な方策について』中央教育審議会 2002.9.30
- (3) 前掲(2) p.3
- (4) 『子どもの体力向上のための総合的な方策について』(答申の概要)中央教育審議会 2004.1.20
- (5) 前掲(2) p.5
- (6) 『平成16年度体力・運動能力調査報告書』文部科学省2005.10 p.18
- (7) 『平成17年度京都市立学校児童・生徒新体力テスト結果報告書』京都市教育委員会 2006.3 p.13
- (8) 前掲(7) p.43
- (9) 前掲(1) p.173
- (10) 前掲(1) p.173
- (11) 前掲(2) p.6
- (12) 長沼君主「自律性と関係性からみた内発的動機づけ研究」『動機づけ研究の最前線』北大路書房 2004.9 p.57
- (13) 『スポーツ少年団とは』財団法人日本体育協会日本スポーツ少年団 2004.1 p.3
- (14) 前掲(13) p.3
- (15) 「生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興の在り方について」保健体育審議会 1997.9 p.8
- (16) 前掲(2) p.16
- (17) 『小学校学習指導要領解説 体育編』文部省 1999.5 p.11
- (18) 前掲(17) p.12
- (19) 前掲(17) p.13
- (20) 前掲(17) p.13,14
- (21) 前掲(1) p.184
- (22) 前掲(15) p.10

- (23) 前掲(2) p. 9
- (24) 前掲(13) p. 3
- (25) 永井洋一『スポーツは「良い子」を育てるか』NHK出版 2004. 6 p. 26
- (26) 浅井利夫『こどものスポーツ医学』新興医学出版 2001. 2 p. 8
- (27) 前掲(1) p. 178
- (28) 前掲(1) p. 180
- (29) 前掲(1) p. 162
- (30) 前掲(25) p. 111
- (31) 金子幸一「発育期の体力・運動能力の発達と運動」『スポーツ医学から見た年齢別・性別スポーツ指導』文光堂 1994. 11 p. 35
- (32) 深代千之「年齢に応じたスポーツ指導の科学的基礎」『スポーツ医学から見た年齢別・性別スポーツ指導』文光堂 1994. 11 p. 3
- (33) 前掲(32) p. 4
- (34) 前掲(31) p. 37
- (35) 前掲(31) p. 37
- (36) 『岩波 生物学辞典』岩波書店 1984. 3 p. 287
- (37) 井上達夫他『共生への冒険』毎日新聞社 1992. 5 p. 24
- (38) 前掲(37) p. 25
- (39) 細江文利『子どもの心を開くこれからの体育授業』大修館書店 1999. 3 p. 203
- (40) 前掲(39) p. 203
- (41) 森司朗「6章スポーツにおける内発的動機づけ」『スポーツ心理学の世界』福村出版 2000. 10 p. 91
- (42) 前掲(1) p. 184
- (43) 前掲(1) p. 184
- (44) 前掲(2) p. 16
- (45) 前掲(2) p. 16
- (46) 前掲(1) pp. 184～186

第2章 総合運動部が目指すもの

第1節 なぜ「総合運動部」なのか

(1) 子どもの側からのメリット

子どもが興味・関心に応じて、多様なスポーツができるよう、複数の種目に取り組むことができることが“総合運動部”の利点であるとされるが、小学校期の子どもたちは複数の種目を行うことをどのくらい求めているのか昨年度の意識調査からみる。

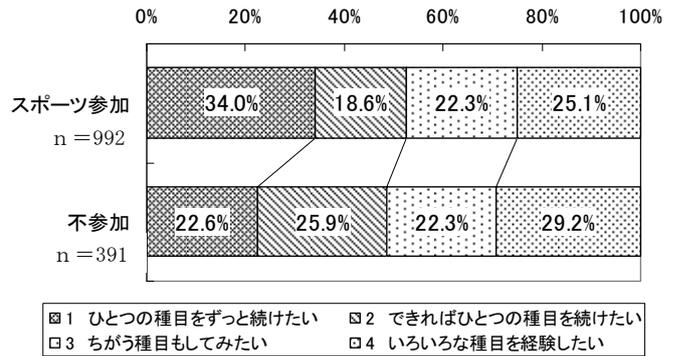


図2-1 種目の継続について

拙稿「No.505スポーツを大切に思う子どもを育てるスポーツ指導を求めて」『平成17年度研究紀要』京都市総合教育センター

図2-1は、スポーツ参加群と不参加群に分けて、参加したい種目数について聞いた設問である。

スポーツ参加群の子どもは、ひとつの種目を続けたいと思っている割合が34.0%であるが、両群ともに半数前後の子どもは多種目を経験したいと思っていることがわかる。

図2-2は、スポーツ参加群の子どものみを対象に、現在参加しているスポーツに対する思いを聞いている。この設問では、比率が最も低い部活群でも58.8%が「ずっと続けたい」と答えており、現在しているスポーツは続けたいと考えている子どもの割合が多いことがわかる。

これについては、「活動していく中で子どもがその種目の持つ特性にふれ、その種目の『楽しさ』を体感することによって『もっとしたい』という気持ちになったからであろう」(47)と考察した。

両方所属群の方が「ずっと続けたい」と答えている割合が多いことから、子どもは一つのスポーツを始めるとそのスポーツにより愛着を感じるようになると考えられる。

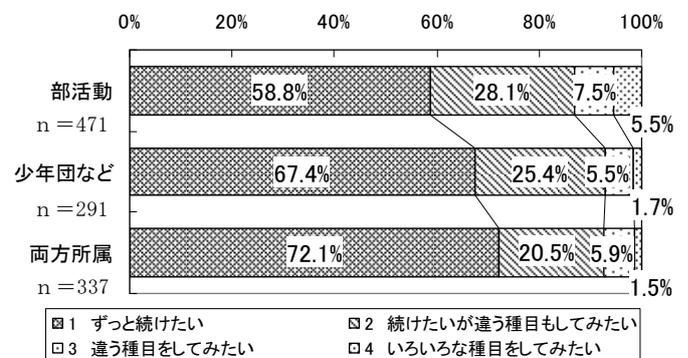


図2-2 参加している種目の継続について

拙稿「No.505スポーツを大切に思う子どもを育てるスポーツ指導を求めて」『平成17年度研究紀要』京都市総合教育センター

スポーツを始める小学校期こそ、まずいろいろな種目を経験することで、本当に自分の興味・関心に合った種目との出会いが可能になると思われる。種目を一つに絞る前に多くの種目を経験したいという子どもの思いに応える取組として、また現在スポーツから遠ざかっている子どもがスポーツに参加しやすくするための取組としても、総合運動部のような種目変更が可能な運動の場が必要とされていると考える。

すでに総合運動部に取り組んでいる学校の指導者は、ほかにも次のような子どもにとっての利点を挙げている。

- ・調整力を身につける段階の小学校の児童にとって、発達段階に合った活動といえる。
- ・巧みな動きを身に付けさせたい中学年の児童にいろいろな運動を経験させられる。
- ・中学年に設定することで、高学年での種目選択の準備ができる。
- ・4年生は放課後の遊びの延長感覚で気軽に参加できる。

(2) 指導者の側からのメリット

図2-3は、小学校の部活動指導者とスポーツ少年団の指導者が、現在の指導種目についてどのくらい競技経験があるか聞いた設問である。

小学校の部活動では現在の指導種目の競技経験をもたない指導者が約40%いることがわかる。自由記述においても、経験の少なさから生じる「迷い」や「悩み」が多くみられた(48)。

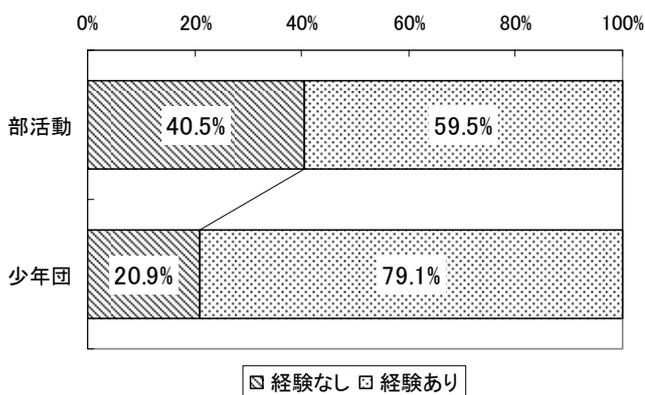


図2-3 指導種目の競技経験について

拙稿「No.505スポーツを大切に思う子どもを育てるスポーツ指導を求めて」『平成17年度研究紀要』京都市総合教育センター

一つの種目を1年通して指導する場合、ある程度はその種目に対する専門的な理解や技術指導のノウハウが必要と考える。しかし、複数種目を行

う場合には、一つ一つの種目についての専門的な理解は少なくとも活動が可能になることが期待できる。年間に複数種目を指導する“総合運動部”は教職員の指導者の「種目に対する専門性が少ない」という悩みにも応えるものとなるかもしれない。スポーツ経験の少ない教職員も「こういう活動なら自分も指導に参加できそうだ」と思える活動になりえるかもしれない。また、指導者の異動による部活動への影響も小さくできる。

指導者の立場や学校という組織の立場からみても、総合運動部には多くの利点があるといえる。

第2節 総合運動部が大切にしたいこと

(1) スポーツにおける競争をどう考えるか

前章第1節第3項でみてきたように、子どものスポーツの活動内容が早期に競技化、専門化してきているという指摘がある。しかし、運動能力に優れた一部の子どもたちは、その中で力をつけ、スポーツの楽しさも味わっていることであろう。全部を否定するものではないが、早い段階から勝つことを求められ、チーム内でも競争が激しいスポーツの場に子どもが入ることは、人間形成に多大な影響を与える可能性を否定できない。

能力と運に恵まれ、勝ち続けられる子どもは一握りである。途中でドロップアウトしてスポーツから離れたり、楽しさを味わうことなくスポーツ嫌いになったりする子どもを作ってしまう恐れもある現状は考えなければならない面も多い。

ただし、昨年度の意識調査でも多くの子どもたちが「達成」や「競争」を「スポーツの楽しさ」として求めていることがわかった。

次頁図2-4は競い合うことに絞って、子どもに意識を尋ねた設問だが、不参加群の子どもも約半数は競い合うことを楽しみたいと考えている。スポーツ参加群との差やスポーツ参加群でも競い合うことに消極的な子どもがいるのは、自由記述から考えると、負けたときや失敗したときにいやな思いや恥ずかしい思いをした経験からではないかと考えられる。

つまり、スポーツが得意な子どもも苦手意識をもつ子ども、スポーツに参加している子どもも現在参加していない子ども「競い合って勝ちたい」「できないことができるようになりたい」という気持ちを皆もっているであろうということである。

スポーツは「遊びの形態をとりながら、競争の

要素をもち、ルールによって統制された、人類が自由意志で選択した身体活動」(49)であることを考えると、「達成」や「競争」を子どもにどのように楽しませるかという課題がみえてくる。

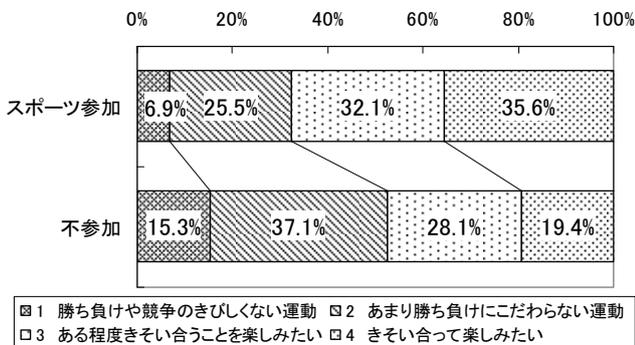


図2-4 勝負や競争について

拙稿「No.505スポーツを大切に思う子どもを育てるスポーツ指導を求めて」『平成17年度研究紀要』京都市総合教育センター

子どもたちが、スポーツの中で自信を失ってスポーツから離れてしまうことなく、「競争」や「達成」の楽しさを味わうためには、効果的な目標設定を考える必要がある。

ここでは、「結果目標」と「行動目標」とについて考えてみる。

「結果目標」について森は「相手のミスで勝って結果目標を達成したとしても有能感が高まらないし、すぐれた競技内容であったにもかかわらず負けたことで目標が達成できなかったと評価することは、それまでの努力を否定し、動機づけにマイナスとなりやすい。さらに特定の結果を目標とすること自体、不安や緊張を生み、プレーへの集中を妨げる原因となる」(50)と指摘している。

それに対して「行動目標」については「相手の行動やレベルにかかわらず、選手自身がコントロールできるという性質をもっている。このことは、自分のやるべきことに集中することを可能にすることから、結果として、目標の達成とそれともなう有能感の獲得の可能性を高めるものとなる。また、たとえ目標達成に失敗したとしても、自分のやるべき行動が明確なことから、目標設定に向けた努力が継続されることが期待できる」(51)と述べている。

したがってスポーツにおいては、勝敗や順位といった結果を重視した「結果目標」ではなく、特定の結果を導くために必要な具体的な行動や競技内容を重視した「行動目標」を設定すべきである。

また、「競争」そのものについても加納は「『競争』は、相手の存在を『肯定』する。それどころ

か、相手を尊重しなければならない。スポーツの世界では、相手は、まず第一に、自分と『一緒』にその活動を享受し合う『仲間』なのだ。第二にスポーツにおいて戦わせるのは相互の技能のみである。(中略)ゲームが終われば、むしろスポーツの世界を共有する『個性的な友』であることの方が重要な意味をもってくる」(52)としている。

子どもがスポーツ活動の中で、指導者や友だちと深くかかわりながら、「達成」の過程から有能感を高めること。また、同じスポーツに親しむ他のチームの仲間との「競争」の過程から競い合うことの楽しさと、尊重し合うことの大切さを体感できて、競い合うことが勝者にも敗者にも意味あるものとなること。そのようなスポーツの過程と人とのかかわりを通して、子どもたちが支え合い高まり合えるスポーツ活動を求めていきたい。

「競争」と「共生」は両立することを、子どもたちがスポーツ活動の中で実感を伴って経験し、意識できるようにすることが大切である。

スポーツに対して多様な現状と意識をもつ子どもがいる小学校の部活動において、全ての子どもに「達成」や「競争」の楽しさを経験させるために考えられる効率的な方法の一つは、能力別、志向別のグループに分けて活動することである。

しかし、スポーツを子どものよりよい人格形成の場にするという健全育成の精神から考えると、「等質」のグループ内で効率よく楽しさを味わうよりも、さまざまな子どもがいる「異質」のグループで葛藤を経験しながら味わう楽しさに意味があると考えられる。小学校の部活動、特に総合運動部の活動ではこの「共生」の視点こそ大切にしたい。

ただし、常に「達成」や「競争」のみの活動である必要はない。ダンスのような自己表現の楽しみや、外遊びの延長もしくは昔の遊びのような活動も考えられる。

また、体ほぐしの運動は、苦手意識をもつ子どものためばかりでなく、普段、競技化、専門化した場でスポーツをしている子どもにとっても、新鮮なものであり、運動・スポーツと自分との関係を見直すよい機会になるとと思われる。

(2) 人を大切にするスポーツ活動のために

ア 運動にかかわる「有能感」について

昨年度の研究において、特に運動・スポーツに苦手意識をもつ子どもに対しては、スポーツ活動を通して「達成」「克服」の喜びを知り、「やれ

ばできる」という“有能感”をもたせることで、自分が成長していく自己実現の“楽しさ”を感じることが大切であると考えた。

内発的動機づけに関する研究で、長沼は有能感について「有能さ、自律性、関係性の、それら三つの基本的欲求が充足されることによりウェルビーイング (well-being) へとつながる」(53) と述べている。“有能感”について、森は「楽しさの土台に運動に関する有能さの認知が介在している(中略)運動経験の中でどのような有能感を、どの程度認知するのかということが私たちのその後の運動に取り組む態度や姿勢につながり、生涯スポーツへと発展していくことになる」(54) と述べている。苦手意識をもつ子どもを運動やスポーツに向かわせるために“有能感”は欠かせないものであると考える。

有能感以外の内発的動機づけの源泉として、長沼は「行動の重要さ(価値)」と「関係性」を挙げている。その価値が「自己の価値観と矛盾のない形で取り込まれている状態(自己決定している状態)が、価値の内在化されている状態」(55) であると述べており、価値が内在化されることが重要であると考えられている。

関係性には、情緒的安全(安心)と親密欲求の二つの側面があり、「前者が他者との良好な関係を保っていると感じているといった関係性の充足の度合いを示しているのに対して、後者は他者により良好な結びつきをもちたいといった関係性への欲求の度合いを示している」(56) と考えられている。そして、これら三つの要素相互の関係が研究されてきた。

そこで本研究では、スポーツにおいて自己や集団にかかわる事柄と子どもたちの有能感とがかわりをもたずであると考え、簡単な質問紙による意識調査を計画し(表2-1)、調査の構造を考えた(図2-5)。

表2-1 調査の枠組み

	自己にかかわるもの	集団の広がりにかかわるもの
有能感	1. スポーツは得意か 2. やればできると思うか	① 今の仲間とならやればできると思うか
価値	3. スポーツは好きか 4. 力いっぱい活動しているか 5. あいさつや言葉遣いに気をつけているか 6. 約束やルールを守っているか 7. しんどいこともすすんでしているか	② 部活動が楽しみか ③ どの子どもも力いっぱい活動しているか ④ どの子どももあいさつや言葉遣いに気をつけているか ⑤ どの子どもも約束やルールを守っているか ⑥ しんどいこともみんなですんでいるか
	8. 友だちに声をかけているか 9. 指導者に相談に行くか 10. 友だちや指導者との関係を大切にしているか	⑦ 友だちはできたか ⑧ 友だちから声をかけられるか ⑨ 指導者の声かけはあるか ⑩ 仲間は友だちや先生との関係を大切にしているか

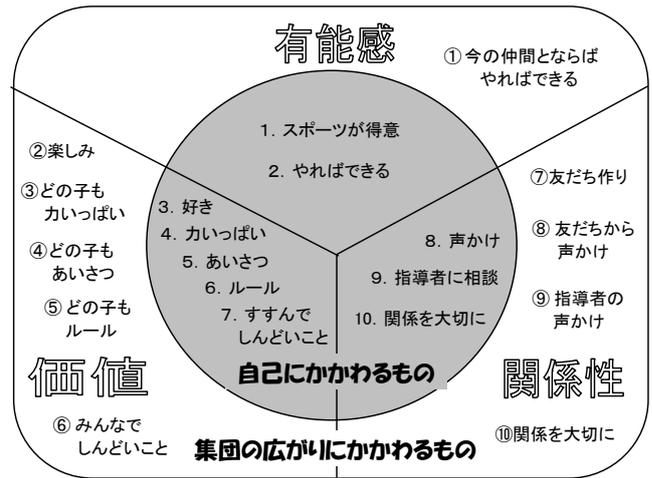


図2-5 調査の構造

イ 運動・スポーツに集中できる環境について

子どもたちの多くは「スポーツの楽しさ」として「達成」「競争」の楽しさを求めている。それでは今年度の研究協力校の子どもたちは、どのような意識をもっているのだろうか。

実践研究に入る最初の段階で「スポーツの楽しさ」と「スポーツをされていて楽しくないとき」について研究協力校の子どもたちの意識を調べた。

運動・スポーツをして楽しいと感じるときについては、13項目の中から楽しいと感じる項目を順に3項目選ばせた。そして、一番目の“楽しさ”に3点、二番目に2点、三番目に1点として選択肢に配点集計し、回答結果の比率を百分率で表したものが次頁図2-6である。

A小学校は「できなかったことができるようになったり、記録が伸びたりしたとき」「試合に勝ったとき」の順に比率が高く、昨年度の調査結果と同じような傾向を示した。

B小学校は「友だちと仲良く運動したとき」が最も比率が高く、全体にちらばりがみられた。

学校の実態や集まった子どもの現状には、多様性があり、指導者は子どもの実態を意識して指導することが求められる。

一方、運動・スポーツをしていて楽しくないときはどのようなときであろうか。楽しいときと同様に、11項目の中からスポーツをしていて楽しくないと感じる項目を順に3項目選ばせた。そして、一番“楽しくないとき”に3点、二番目に2点、三番目に1点として選択肢に配点集計し、回答結果の比率を百分率で表したものが図2-7である。

A, B両小学校に共通してみられた特徴は、楽しいときの意識には違いがあったが、楽しくないときは「友だちと仲良く運動できなかったとき」

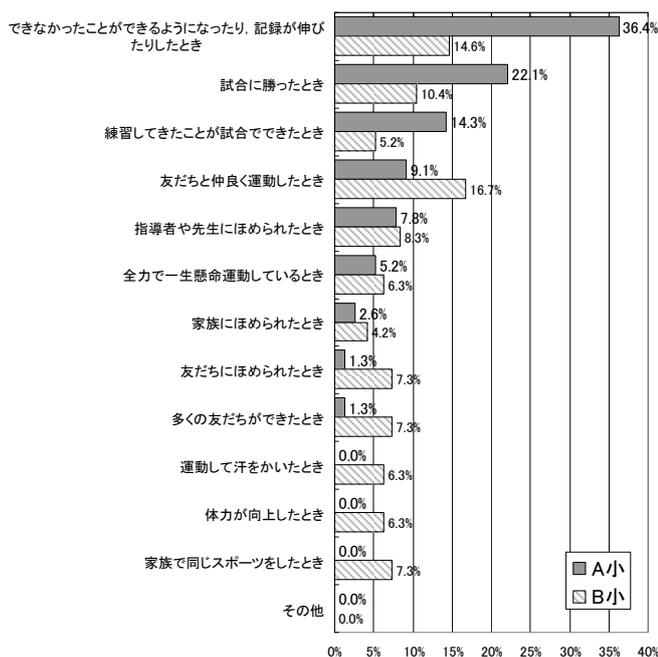


図2-6 運動・スポーツをして楽しいとき

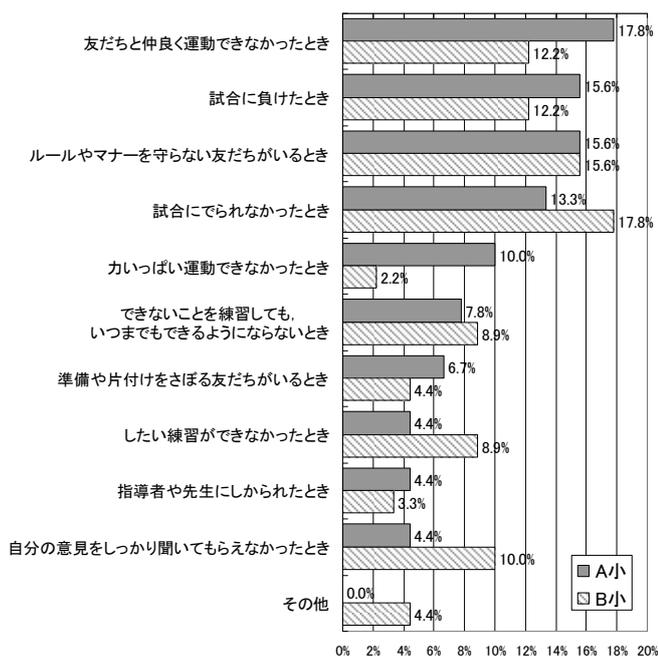


図2-7 運動・スポーツをして楽しくないとき

や「ルールやマナーを守らない友だちがいるとき」の人とのかかわりに関係する選択肢の比率が共通して高くなったことである。

この理由は、子どもたちが「スポーツに集中できる環境を求めている」(57) ことから考えることができる。

子どもたちは、指導者に様々な「厳しさ」を求めているが、「真面目にスポーツする」ことを願う子どもたちは、指導者にスポーツに集中できる環境を求めている。そのための『きびしさ』を指導者に求めている」(58) と考えられる。

スポーツに、人とかかわりの楽しさを求めている子どもはもちろんだが、達成や競争の楽しさを求めている子どもたちも、友だちとのトラブルがあったり、ルールを守らない友だちがいたりすると、そのことが気になりスポーツに集中できなくなる。その結果、達成に至らなかったり、一生懸命競争することができなかつたりして「楽しさ」が阻害されてしまうと考えられる。

総合運動部においても、子どもたちがスポーツに集中できる環境をいかに保障していくかが、指導者に求められているといえる。

ウ 人を大切にせるスポーツ活動のために

指導者がスポーツを通して最も子どもに伝えたいことは「一生懸命取り組むことの大切さ」であった。そのために指導者の役割は「どの子どもが、自分の努力でなんとかなりそうだと思う条件を作り出すこと」(59) であると考えた。

そのために昨年度は「技術や戦術にかかわることの指導」「活動の場やルールの工夫」「スポーツマンシップとフェアプレー」「子どもの心身の健康」について考察した。(60)

本研究では、総合運動部でスポーツの得意な子どもと苦手意識をもつ子どもが、友だちと仲良く、ルールやマナーを守って共に高まり合うスポーツ活動をしていくためには、人を大切にせるスポーツ活動を展開することが大切であると考え、次頁図2-8のように研究の構造を考えた。

スポーツマンシップについて広瀬は、「一言で言えば『尊重 (respect) すること』である。試合の相手を尊重し、審判を尊重し、試合の規則を尊重すること。このことは自分の行うゲームそのものを尊重することになる」(61) と述べている。

総合運動部の活動において、子どもたちがお互いの違いに気付き、認め合い、互いに尊重し合う中で、「競争」や「達成」の過程を共に楽しむこと

ができるようなスポーツ活動を経験させたい。

そうすることで「スポーツが大好きな子ども」が自分にとってのスポーツの意味や意義に気づきスポーツが自分にとってかけがえのないものになり、すすんで生活に運動・スポーツを取り入れようとする「スポーツを大切に思う子ども」に育っていくと考える。

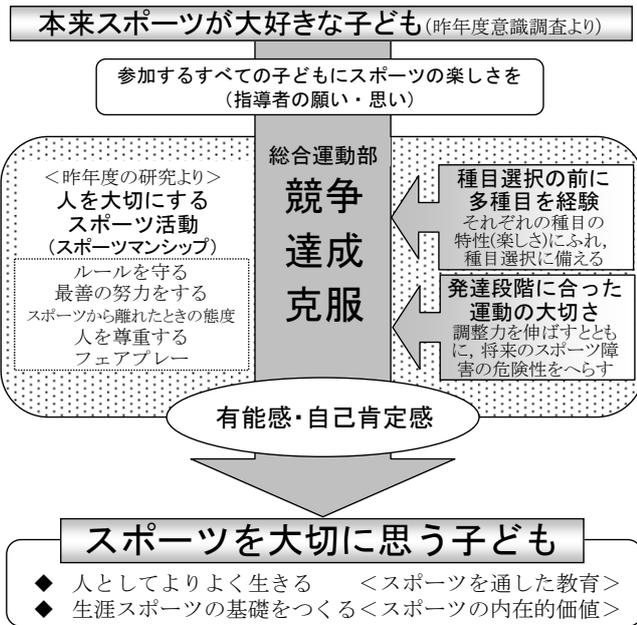


図2-8 研究の構造図

- (47) 前掲(1) p. 168
- (48) 前掲(1) p. 176
- (49) 広瀬一郎『スポーツマンシップを考える』小学館 2005.5 p. 20
- (50) 前掲(41) p. 96, 97
- (51) 前掲(41) p. 97
- (52) 加納弘二『生涯スポーツの理論と実際』「第3章青年とスポーツ」大修館書店 2001.4 p. 83
- (53) 前掲(12) p. 48
- (54) 前掲(41) p. 91
- (55) 前掲(12) p. 57
- (56) 前掲(12) p. 42
- (57) 前掲(1) p. 180
- (58) 前掲(1) p. 180
- (59) 前掲(1) p. 181
- (60) 前掲(1) pp. 180~184
- (61) 前掲(49) p. 22

第3章 総合運動部の実践

第1節 研究協力校について

(1) A小学校

ア A小学校について

A小学校は東山区にあり、明治2年「下京第28番組小学校」として誕生し今年で創立137年を迎える学校である。六波羅蜜寺の北に隣接し、校区には社寺や伝統産業「清水焼」の陶器問屋も多く、家並みは歴史的な良さを残している。

造形教育については50年以上に亘る取組の歴史と伝統をもつ学校である。平成16・17年度は「体育・スポーツ推進校」の指定も受け、図画工作科と体育科の2本柱で研究を進める学校である。

現在は児童数69名、教職員15名の小規模校であるが、「創造的で個性豊かな、心身ともにたくましいA小の子の育成」を学校教育目標にして、部活動に対しても全教職員がかかわり、地域の指導者の方とともに、運動の日常化をねらい取組を進めている。

総合運動部についても早くから取り組んでいるが、さらに、バレーボール、合気道とも練習日が違うため、それらの種目も兼ねて複数の部活動に参加している子どもも多い。

イ 指導者の思い

教務主任でもある研究協力員は、教職員全員で子どもを支える体制としてどのように部活動を組織していくかが課題であると考え、A小に合った持続可能な組織作りを試行錯誤している。総合運動部の活動も計画的に進めたいと考えている。

体育主任でもある研究協力員は、週4日活動する部活動を、教職員が入れ替わっても維持できる体制を整えたいと考えている。「みんなの部活動」として取り組んできた良さは残しながらも、スポーツの場としてルールをしっかり守ることを大切にしていきたいと考えている。

また、小規模校の狭い人間関係のままにしておく、子どもたちがどこかで壁にぶつかる可能性があると考え、タグラグビーを取り入れて対外試合にも参加し、それに向けてしっかり練習することでスポーツの楽しさも味わえるのではないかと考えている。しかし、1～6年生全員でやることの難しさを感じており、活動時間や場所を分けることも必要ではないかと考えている。

最も若い研究協力員は、スポーツの指導経験の少なさから子どもに積極的にかかわれないで他の指導者に任せきりになっているのではないかと考えていた。また、活動中に遊んでいる子どもが多いので、ルールをしっかりと決めて活動したいがどうすればよいか迷っていると話していた。

いずれの指導者も、現状の部活動を子どもたちが本当にスポーツの楽しさを味わうことができるような活動にしていきたいと考えていることがわかったが、それぞれに迷いをもっていた。

ウ 年度当初の子どもの実態

総合運動部には6年生7名、5年生7名、4年生8名、3年生2名、2年生6名、1年生3名の33名、全校児童のほぼ半数近くが在籍している。活動日が月曜日と金曜日で、一日だけ参加している子どももおり、毎回の参加人数は20数名である。

練習初日の子どもたちの印象は、中学年までは、人懐っこく話しかけてきたり、こちらから話しかけたりしたときの態度が好印象であった。活動も活発でここ数年体育の研究にも取り組んできた様子が窺えた。しかし、高学年に話しかけたときにまっすぐこちらを見られない子がいて、高学年の人間関係にむずかしさがあることが窺えた。そのことが部活動で高学年の子どもが力いっぱい活動するための障害になっていると感じた。

エ 方向性について

研究協力員の方々との話し合いの中で、今年度の取組について方向性を話し合った。

- ・児童数が少なく人間関係が狭い子どもたちを他の学校との交歓会に積極的に連れ出したい。
- ・交歓会や大会に合わせて種目を変えていく。試合を目標にして意欲的な活動を引き出したい。
- ・年間計画を立てて、計画的に進めていく。

全ての子どもがスポーツの楽しさを体験するために「人を大切にするスポーツ活動」の実践をお願いするとともに、子どもたちの様子を見ながら話し合いを続けていくことにした。

また、何回かの部活動参観と研究協力員の話から、高学年を中心に人間関係へのかかわりが必要であると考えた。現在の担任も人間関係への対応が課題であると話してくれた。小規模校で人間関係が固定化していることが、部活動でも活発な活動につながらない原因になっていると思われた。人間関係を改善することで、部活動全体への大きな効果が見込まれると考えた。

(2) B小学校

ア B小学校について

B小学校は下京区との境に位置し、北は四条通、南は五条通、中央市場に隣接し、節分祭で知られる壬生寺が校区にある小学校である。

現在は児童数395名、教職員22名の中規模校である。科学教育を中核に据え、「ひとりひとりが心豊かにたくましくみんなと共に伸びあう子どもの育成」を学校教育目標にして、日常の学びを意味あるものにし、児童の問題解決能力を育てる教育活動を推進している。文部科学省の理数大好きスクール(17, 18, 19年度3年指定)、京都市教育委員会の「みやこパイロットスクール」(18, 19年度2年指定)の指定を受け研究を進めているが、現在は国語科、体育科も校内研究に取り入れている。

部活動は全教職員がかかわり、地域の指導者とともに、バスケットボール・テニス・卓球・陸上・楠ハーモニー・六斎キッズの部活動が運営され、スポーツ、文化両面の取組を進めている。

イ 指導者の思い

研究協力員は名称が「陸上部」であることと、自分が陸上競技の経験者であるため、走ることを中心に多種目の活動をしたいと考えている。

しかし、もう一人の研究協力員が6年生担任であるため、京都市小学校大文字駅伝大会へ向けての練習会「くすのきランナーズ」の指導がほぼ毎日あり、一人で指導することが多くなることに多少の不安を感じている様子であった。

これまでは、活動時間の前半は走ることを中心に、後半は子どもの希望を聞いて活動してきた。将来的には陸上の記録会や競技会に出場することを目標に練習をしたいと考えている。

研究協力員は「陸上部」の子どもたちについて、4年生と5年生の男子がほとんどであり、一人一人は素直で子どもらしい子が多い。しかし、集団の約束やルールが徹底していないのと、自分のことが中心で、わかっても流されてしまう子が多いことが課題であると捉えていた。

ウ 年度当初の子どもの実態

今年度の部員は4年生と5年生のみで、活動の当初、女子は5年生一人であった。子どもたちの運動やスポーツに対する活動欲求はかなり高いと思われるが、年度初めでまだかかわりが深まっていないため、活動はしているが目的が見えなかつ

たり、いい加減であったりするところがみられた。活動の約束やルールを徹底させる必要を感じた。

また、部長の男子は大変まじめに取り組む子どもで指導者とともに様々に活動を考え、部員に働きかけようとしているが、彼の思いが部員に伝わっていないために、部員が思うように動いてくれないで困っている様子がみられた。

エ 方向性について

指導者も子どもたちも走ることを中心に進めていきたいという希望をもっていたため、前半の30分は陸上運動をし、後半の30分は様々な活動に取り組むことを基本に計画を立てることにした。

総合運動部としての種目、活動の広がりの部分については任せてもらえるということなので、筆者はB小学校では様々な実験的な活動を計画・実践することにした。

- ▶ 様々なボール運動（子どもの希望）
- ▶ 走に関するドリル練習（動き作りとして）
- ▶ リレー（体育学習の延長として）
- ▶ 跳び箱運動（体育学習の延長として）
- ▶ 体ほぐしの運動（体育学習の延長として）
- ▶ 王様とり（放課後遊びの延長として）
- ▶ タグラグビー（新しいスポーツ種目として）
- ▶ 水遊び（シーズンスポーツとして）

ただし、水遊びについては実施することができなかった。しかし、京都市体育研究会の体づくり運動領域の授業研究会が7月にあり、プールでの体ほぐしの運動に取り組んだ実験的な授業であったため大変参考になった。

第2節 「人を大切に作るスポーツ活動」の実践

(1) ルールを守る

子どものスポーツにおいても「ルールを守る」ことは公平性を確保した上で競争するための大前提である。しかし、勝負を競い合う場面などでルールを遵守してプレーすることは大人でも難しさを伴う。そこで実践の場面から「ルール」について三つの場面に分け整理して考えたい。

育てたい子どもの姿

部活動という集団生活のルールと、そこで行われるスポーツのルールを知り、そのルールを尊重してスポーツを楽しみ、さらに楽しい部活動にするためにルールを工夫していく子ども

ア ルールを知る

はじめの実態

- ゲームにおいて、ルールが明確でないために、自己主張が強く、意見を言う子の判断が通る。
- 部活動の時間になっても遊びに夢中で、着替えようとししない。5分過ぎて着替えに行く。
- 部活動終了後、子どもたちはさっと帰宅の用意をする子と、ブランコで遊ぶ子に分かれる。
- コートが片付いたら、下級生と遊びだし、そこを指導者に叱られる。
- 集合に時間がかかりすぎ、集まる意識は薄い。
- リレーの進め方には慣れてきているが、レーンのチェンジで毎回迷いを見せる子がいる。

ルールを知るとは、ルールを守る上での前提条件である。特に新しい種目が変わってすぐは子どもたちが理解しやすいように、丁寧に説明をしなければならない。子どもにとって初めての種目の場合は、簡単な説明だけでは理解しているかどうかも自覚できないことがあると思われる。

ゲームにかかわるルールだけではなく、活動の場の準備・片付けの分担、挨拶の仕方や、時間の使い方など部活動の進め方にかかわる約束も共通理解することで、スポーツをする時間が増え、子どもたちはスポーツに集中できるようになる。

そのためには、指導者が約束やルールを明確に子どもたちに示すことが必要である。

指導者のかかわり

- リレーの活動の場やルール、進め方、役割分担などを示したカードを配り、説明する。
- 決めただけの係を覚えていないので始まらない。一度全員チームごとに整列させ、指導者は係を順に呼んで、場に着かせる。走るチームにも声をかける。「次は係をしなあかんし、しっかり見ときや」
- さらにメンバーが増えたため新チームを作り、役割分担も書き直した模造紙を用意した。
- 跳び箱運動全4回の約束をする。
 1. ふざけていると怪我につながる運動なので真剣にする。友だちが勇気を出して一生懸命チャレンジできるように協力する。
 2. 跳んだあとの安全確認、次の人への合図
 3. 次の人の試技が終わるまで見守り、アドバイスできることは伝える。

子どもたちに「約束やルールを守りなさい」と言うためには、子どもが約束やルールを理解し、知っていることが前提となる。そのためにもまず約束やルールは明確に示すことが大切である。

部活動では新しい部員が増えたり、家庭の用事で欠席しがちな子どもがいたりして、子どもの出入りが激しいこともあり得る。繰り返ルールの確認をすることが必要である。

イ ルールを守る

ルールを守ることは、スポーツがスポーツであるための必要条件である。しかし、部活動は異学年の子どもの集団で、生活の中でルールを共有していない子どもが集まって活動することが多いためはじめの指導が肝心になる。

はじめの実態

- ポイントの取り方に不正？失敗しても相手にポイントが入らないことが何回もある。
- 線審の子への威圧的な態度「今のどっちや、入ってるな！」
- ずっと順番を待ち続けている子がいる。回った回数に極端な差がある。
- 練習前に6年生担任も含めて子どもたちのことについて意見交換。「得意の『今のノーカンなもう一回』なんかをどうするかやなあ。」
- 指導者から見えない部分で1レーン分くらい内回りして走る子どもがいる。
- 一人だけ審判に行ったけどなぜ？
「だれも行かないから行った。」
野球と総合運動部とどちらが楽しい？
「野球の方が楽しい。片付けをだれか一人だけでやらなあかんかったり、ルールを守らない子がいたりするから」

プレー中のルールに限らず、準備や片付けについてもずるいことがまかり通れば真面目にしている子どもがやる気を失ってしまう。

そのためには、ルールを徹底させるための指導者のしっかりしたかかわりが必要である。

指導者のかかわり

- 指導者は、時たまゲームを止めルールを確認していた。特にタグを取られた後、取られた場所に戻ってプレーを再開することを、厳しく指導していた。子どもが戻らずにプレーを再開しようとするのを、何度も根気よく止めやり直しさせていた。もともと何とか勝ちたい気持ちの強い子どもなので再開までの時間が早く、パス出しも周囲をよく見ているのでよいプレーが見られるようになる。指導者はそこですかさず大きな声で誉めていた。指導者に指導されるとき、子どもが「はい」「はい」としっかり返事をしていることに気付く。

- 1回目の意識調査の前にランチルームで子どもたちを待っていた。4年生4名と話していると、5年生が来て窓の外の友だちと話すためにランチルームの窓枠を乗り越えて出て行く。
- 意識調査終了後、窓から出ることがいいことか、悪いことかを知っていたかどうかを聞き、知っていても出てしまった人は正直に手をあげてごらんと話すと、出て行った子どもの多くが挙手した。そのうちの一人に理由を聞くと、「みんな出ていたから出てしまった」ということだったので、そういう人は先生に怒られたときどんなことを言うと思うかと尋ね、「僕だけと違う」とか「〇〇君も出ていました」などと言いつつ違うかなと話した。そして「わかっていることはしっかりできる子になるう。人のせいにする事なく」と話した。
- ランチルームを出るときに、友だちのいすを入れる子がいたので、すかさず誉めるとそれに続く子が何人もいた。また、外からまわって来て網戸を閉める子どももいた。

一つ目の例はプレーにかかわるルールへの指導例である。子どもの中には、少しでも有利な条件でプレーを再開しようとする者もいる。この段階はタグラグビーの2時間目であったため、他の子どもはやっとルールや進め方が理解できてきたところであり、ルール違反であるかは子どもに判断できない。そのために「まだ慣れていないから…」「子どものルールだから…」といい加減にしておく、自己主張の強い子ども中心のゲームになりがちである。指導者がしっかり指導することでおとなしい子や苦手意識をもつ子が安心してスポーツに取り組める環境を保障することになる。

また、この日はしっかりとルールを守らせることで、スポーツが得意な子どもにとっても、より早くタグラグビーの特性が楽しめるゲーム展開を実現することができた。

そのような展開に導いた理由は、ルール違反をしそうになる子どもを指導者がしっかり見て指導し、その子がルールに則って良いプレーをしたときに、すかさずみんなの前で誉めたことで、良いプレーのイメージを子どもたちに示したこと、その子にも、また良いプレーをしたいという動機づけができたことであると考えられる。

二つ目は部活動という集団生活のルールにかかわる例である。ここでも指導者がルール違反を見逃さずに、その場で子どもたちに投げかけることで、子どもたちは自分の行動を振り返っている。

中学年以上の子どもの多くは、物事の善悪についてわかっている。気付かせる声かけをすることで、雰囲気流されていた子どもは我に返ったようにしっかりしてくる。この日のその後の活動は、きびきびとした行動がとれ、活動の時間もしっかり取ることができた。しかし、一回の声かけで全てが変わることはなく、根気が必要である。

ウ ルールを工夫する

ルールを知り、ルールを守ることがある程度できた子どもには、そのスポーツをさらに楽しむために、「ルールを工夫する」経験を積ませたい。

そこで、「王様とり」に取り組んだ。めあてを「ルールを知り、ルールを守ってみんなで楽しく遊ぼう」として役割分担のはっきりしたルールで行った。役割分担と勝敗が決する場合だけを確認して始めたが、2ゲーム目にはルールに慣れて、見ている楽しいゲームになってきた。

王様とり（ルールを知り守る）

- はじめは様子がわからず、守備隊に人気があったが、慣れてくると攻撃隊に人気が移る。
- 女子も攻撃隊に立候補し「がんばります！」とやる気になってきた。両チームとも攻撃にも積極的なため攻守入り乱れて面白い。子どもたちは息を切らせて走り回っている。
- 反省会で「どこまでも逃げて行く人がいたので困った。」との意見が出たので、次週はコート限定してやることを話し合う。
- 今日楽しく活動できたのは「みんながルールを知って、しっかり守ろうとした」からであることを子どもたちと確認した。

これまでの取組で、約束やルールを守ることができる子どもに育っていたため、すぐルールに慣れ、みんなが楽しめる状態にすることができた。

与えられたルールを守って活動することで、子どもは「楽しい」活動であることを実感できたため、「もっと楽しむために」子どもたちからエリアを限定する新ルールの提案が出てきたと考える。

王様とり（エリアを限定）

- 前回の話し合いをうけてエリアを限定（長方形のコートを利用）し、陣地の形、大きさは自分たちで決められるようにする。
- 工夫したり隙をついたりすることで、自分より速い子を捕まえるチャンスがあるため、あまり走ることが得意でない子どもも楽しんでいる。
- 3回で終わる予定を4回したが、4回終わっても「もう一回したい」という意見が多い。

- 話し合いの末、次回から王様は相手の守備隊を捕まえられることにする。
- 片付けも走って素早くできるようになった。

場にかかわるルールを新設したことで、走る速さだけでは勝負が決まらなくなり、走ることに苦手意識をもつ子どもがさらに積極的になり、自分より速い子どもを追いかけ回す姿が増えた。

王様とり（王様の役割追加）

- ルールの変更：王様は相手の守備隊を捕まえることができる。
- 王様が積極的に陣地から出るため、隙もできてゲームが流動化しやすい。王様自身も守備隊を捕まえに行けるし、守備隊も今までは捕まらない安心感があったが、緊張感をもってゲームできるので、より楽しくなったように見える。
- 捕虜から脱出するときのルールについて意見が出たが、次回への課題とする。
- 反省会では、与えられたルールで満足せずに、自分たちで工夫することでもっと楽しくなることを確認した。

王様は守ってもらうか逃げるだけであったが、子どもがゲームの特性をつかんできたため、「さらに楽しむために」王様の役割を追加する提案をした。このルール追加の影響は大きく、子どもたちがどの役割になろうとも、わくわくするようなゲームが展開されるようになった。

王様とり（ゲーム復帰に関する変更）

- 子どもたちが変えてきたルールを確認する。
 - ① コートを決める、出たら捕虜になる。
 - ② 王様は守備隊を捕まえることができる。
 - ③ 味方の攻撃隊にタッチしてもらったら、一度自分の陣地に戻って再びゲームに参加する。
- 子どもたちはどんどん攻撃して楽しもうという気持ちがあるため、ゲームがよく動く。
- 王様も積極的に動くため、1ゲームの時間が短くなり、捕虜になっても長く待つことがない。
- ゲームが流動的になり、捕虜を助けに行くタイミングも増え、さらにゲームが流動的になる。
- 勝ったチームが自然にハイタッチをして喜びを表すようになる。

走るのが苦手な子どもは、味方にタッチしてもらって自陣に戻る途中でまた捕まることが多かった。このルール変更でゲーム復帰が落ち着いてできると共に、形勢が一気に逆転する展開もできた。子どもたちがルールを工夫することの大切さを理解するには、現在のルールを理解し、十分に楽しむことが前提となるということがわかった。

(2) フェアプレー

フェアプレーの本質とは「スポーツだけでなく、すべての競争場面で他人に思いやりをもち、ルール規定を守ること」(62)といわれる。競争を楽しむこともスポーツの楽しみの一つであるので、苦手意識をもつ子どもが多いと思われる部活動の場面では、たとえ自分に不利になっても、公平性を保つ言動ができたり、相手に思いやりをもって接したりすることが求められる。

育てたい子どもの姿

決められたルールを守るだけでなく、スポーツと生活の両面で、他人に思いやりをもち、公正公平な態度を望み、身に付けようとする子ども。

はじめの実態

- 力任せのスマッシュも目立ち、ラフなプレーがある。他の子どもが自分を出せていない。
- 2レース目は、競ったレース展開になったため、クロスゾーンでの違反を犯す子がいる。
- ペアの決め方に疑問？上級生が2名で組んでしかも勝ち抜きをしている。
- ペアチェンジのグッパーに不正の疑い？
「ああ、また一緒になってしもたわ (ははは)」
- ジャッジを正確にして相手にポイントを入れた友だちを一瞬にらみつける。
- 3名グループの子が「ぼくら3人やけど…」と言っているうちにゲームが始まり、4人对3人でゲームが続く。
- ラインサッカーは挨拶なし。みんなから少し離れている子どもの様子が気になった

プレー中のフェアプレーはもちろん大切だが、全ての子どもが力いっぱい運動できる部活動のためには、前後の人間関係もフェアになることが必要であると思われる。そのためには、ここでも指導者のしっかりしたかかわりが求められる。

指導者のかかわりと子どもの変容

- 筆記用具を忘れた二人が、友だちに「貸して？」と頼むが、教室に取りに行くように指示。二人は驚いたようであったが、素直に取りに行く。帰ってきた二人の対応を認め、貸し借りを認めれば「正直者が馬鹿を見る」ことになると話す。
- 「遊ぶなよ」「まだ片付けてはるやんか。手伝ってこいよ」と友だちに声をかける子がいた。
- チームの友だちが得点を間違えたときに、自分のチームが不利になるにもかかわらず、正しい得点を主張した。もう一人の友だちも「僕の自殺点があったから」と正しい主張をしていた。

- 2回戦の前に4年生が「次の試合に僕らは出なくてもいいので、ベストメンバーでやって勝ってほしい」と申し出てきた。2回戦はベストメンバーで臨み、次の試合で指導者は「この試合は、勝っても負けてもみんなを出すと決めていたのでそうする」と言って全員交代で出した。

子どもたちにはなぜフェアな態度が大切なのか話すことが大切である。お互いにフェアな態度をとることで人間関係が気持ちの良いものになり、スポーツに集中できてより楽しめることを、部活動の中で実感させたい。

そして、子どもが望ましい言動をとったときにはみんなの前で取り上げ、認めることで、その子ども周囲の子どもも次のフェアな言動へと動機づけられることになると考える。

そのためにも練習や試合の中で指導者が、フェアプレーを実践したり、フェアな人間関係を築いたりして、「フェアプレーとは何か」ということを子どもたちに態度で示すことが大切である。

指導者のかかわりと子どもの変容

- トライ後相手チームにボールを投げ渡したが、うまく受けられずにボールが転がる。6年生は「あ、ごめん」と一言。これまでは見られなかった姿であった。また、交代した後も横にいた子に「これはしんどいわ。いっぱいいっぱいや」と笑顔で話していた。一生懸命運動する気持ち良さも感じているようだ。ずるさが見られなくなり、一生懸命さが目立つようになってきた。
- 「今日は良いプレーがずいぶん見られたし、片付けも協力して素早くできた。他のことが気になったら話が聞けなかったけど、今日は今もしっかり聞いているね」「これがクラブやで」
- 今まで片付け時に遊ぶことが多かったが、片付けでがんばった子どもと「ごめん」と言えた6年生の声かけを誉める。「フェアプレー賞や」

プレー中のフェアプレーやフェアな人間関係への働きかけを続け、子どもたちがスポーツに集中できるようになっていく中で、自己中心的な言動があった子どもが変容してきた。

一人の子どもが変容することで、同様の課題をもった子どもが変容したり、他の子どもが伸び伸びと活動し、自分を出せるようになっていたりして子ども相互のかかわりが増えた。その結果スポーツ活動が活性化したことは、子どものスポーツにおいて人間関係がフェアであることの重要性を示唆している。部活動の中で、フェアな人間関係の心地良さと大切さを伝えていきたいものである。

(3) 最善の努力をする

昨年度の意識調査で、指導者が子どもにスポーツを通して最も伝えたいことは「一生懸命取り組むことの大切さ」(63)であった。

一方、第1章第2節第1項で述べたように、子どもが感じるスポーツの楽しさとは、「できなかったことができるようになったり、記録が伸びたりしたとき」であり、特に苦手意識をもつ子どもはその意識が強く、さらに「友だちと仲良く運動したい」気持ちも強いことがわかった。

第2章第2節第2項で述べたように、今年度の研究協力校の子どもたちも、「できるようになること」や「友だちと仲良く運動する」ことをスポーツの楽しさとして感じていることがわかった。

子どもが「一生懸命に取り組むようになる」ためには、「できるようになること」とともに「友だちと仲良く運動する」ことが大切であると考え。

そこでこの二つの内容について実践の中から振り返りたい。

ア できるようになること

イ 友だちと仲良く運動すること

育てたい子どもの姿

仲間と共に運動の場を運営し、共に競争や達成の楽しさを味わうために力いっぱい運動し、めあてに向かって工夫し努力する子ども。

ア できるようになること

はじめの実態

- 体慣らしの後、5分間走。歩く子やら、全速で走って疲れてペースが上下する子やら、友だちとしゃべりながら走る子もいた。
- 1レース目は、負けていたためしっかり走らない子がいて大差がついた。その子以降の子もあきらめて全力では走らない。
- 着順と記録が一致しないレースがあり、タイム係の技術的な問題と思われる。
- 1チーム3名のところがあり、2回走る子が多いため、2レース目は勝負にならなかった。
- 跳び箱への挑戦を繰り返す。あと少しのところまで行くが越えられない。今日は無理をさせない。できるようになったことを確認し、次は越えられるよと声かけして終わる。最初の不安そうな表情から、明るい表情になって帰る。
- タグを取られるのを恐れ、走ることよりパスすることに気がいってしまう。ボールをもっていない子がどう動いていいかわからず、ボールをもって前に出た子が孤立することが多い。

できない原因は、個人の技能にかかわること、集団の戦術にかかわることのほか、人間関係にかかわることや活動の場やルールが適切でない場合など様々に考えられる。

個人へのかかわり

- 5分ほどあったのでバトンパスの練習をする。指導者の専門的なアドバイスに子どもは聞き入る。競争形式を採ることで盛り上がる。
- バトンパスをデモンストレーション。
- 指導者がテイクオーバーゾーンにいて次の走者に手取り足取り指導していた。見違えるようにバトンリレーが上手くなる。記録的には1レース目とほとんど変わらないが、確実に上手くなった。レースも競ったので、最後までみんな一生懸命走った。
- スキルアップしたことが子どもに実感できないと次への動機づけが低くなる。上手くなったことが子どもたちに伝わるような場で確認すべきであった。
- 指導者は「タグを取らせて、次のプレーにつながることを考えよう」と指導。次第にボールがつながるようになってくる。子どもはタグを取られたらすぐに戻って始めるようになってくる。
- 一人2回ずつ開脚跳びで撮影し、モニターで確認後着手の位置を意識して練習する。
- 苦手な子は跳び箱の上から手でしっかり体を支持して降りる練習。すぐに低学年用の4段は跳べるようになる。その後休むことなく、何度も繰り返し練習していた。

できないことができるようになることで、子どもが意欲的になる場面を多く見る事ができた。特に跳び箱では、できるようになったり、できそうになったりした子どもが自分から繰り返し挑戦する様子が毎時間見られた。

集団へのかかわり

- ばらばらで対応していると、走られ放題であることを経験させ、同じメンバーでディフェンスするにしても作戦を立てることで、有効なディフェンスができることを経験させている。
- 密集に突っ込んでいたり、ブラインドをついたりするような攻撃が見られるようになる。タグを取られないだけでなく、取られることを利用して相手をひきつけ、味方が走るコースを作るような攻めが見られるようになって、見ていておもしろい攻撃が増えてくる。
- 久しぶりなので無理のない範囲で縦の開脚跳びに挑戦。課題を確認する。

- ・手を前後に着く子が多い。
- ・助走は長いが、踏み切りが弱い。
- ・体が浮きたがっているのにすぐに手を着くので着地が不安定で危険な子が数人いる。勢いあまって手をつかずに跳び越える子もいる。

- 着手について次のように伝える。
 1. 手を前後に着くのは、手首を傷める恐れがあるので平行に着く。
 2. 縦の跳び箱の真ん中より遠くに着手する。
- 跳べる子どもに模範演技をしてもらう。頭と腰に注目して見ることを伝える。「同じ高さや」と何人かつぶやくのが聞こえる。
- 前回の反省で、レース間に相談できる時間をとる。どのチームも話し合いを熱心にする。「なぜ、走る順番を変えるのか」が不明確なグループがありそうだったため、グループにめあてを意識させる声かけをして回る。

技術や戦術についてのポイントを見つけたり、考えたりすることで、運動やスポーツを見る目も養われていき、子どもたちの今後のスポーツとのかかわりに生きる力となるだろう。

人間関係や活動の場へのかかわり

- 速い子が入ってくれたことで負け続けていた「情熱チーム」が初勝利。競るレースが増えたことで、一生懸命走る子どもが増えた。そろそろバトンのリレーの仕方に目がいく指導を入れる時期が近づいてきた。
- 指導者は、グルーピングを子どもに考えさせるが、任せきりにしない配慮がある。
- 6段に挑戦していたが、何回も同じような挑戦を続けていた。腰が高く肩が着手位置を越えていくのが怖いだけのため、「しっかり腰が上がっているよ。少し怖さを乗り越えられたら7段でも跳べるよ。」と励ます。しばらく練習するうちに跳べたので、3回跳べた時点で7段への挑戦を勧める。一緒にいると、息を切らせながら何回も挑戦する。しかし、しばらく他の子にかかわっていると、跳べなくなっている。それは他の子も同じで、戻ってきてそばにいただけでまた跳べるようになる。教師のかかわりがあるだけで子どもは意欲的になることを実感。
- 友だちに対して「〇君出て行って、思いっきり蹴りや」とアドバイスしている。声をかけられた子は動きについてはわかってきているが、なかなか上手く蹴れない。子どもの目にはやはり失敗としか映らないのか？友だちの成長に気付かせる指導者の声かけが必要になる。

やればできるかもしれない、または、勝てるかもしれないと見通しがもてたとき、一生懸命がんばることができる。グルーピングやルール、活動の場に対する指導者のかかわりは大切である。

また、跳び箱の例のように、指導者が「見ているよ」とサインを送るだけでも子どもにとってはとても力強い支援になることもある。

苦手意識をもつ子どもにとって、具体的なアドバイスは大切なことであるが、指導者が見守っているだけで力を発揮することがあるということは、指導者のかかわりを考えるときに重要なことなのではないだろうか。

最後の例のように、子どもは友だちが一生懸命全力でプレーしているのか判断できないことがある。指導者がみんなの前でその子の努力と伸びを認めることで、その子も周囲の子も安心して全力で取り組めるようになると思う。

高まりつつある姿

- 1回戦は緊張していて力が出せなかったが、試合が終わってから、子どもたちは自主的に練習を始める。「疲れるし、もうやめたら？」と指導者が声をかけても、子どもたちはやめようとしなない。「タグを取られてから、味方が走りこんでつなぐプレーをしなアカン」と子どもたちが話し合い練習をしていた。
- 試合が終わって6年生が5年生に「来年は初めからもっとしっかり練習しないとあかんぞ」と言っていたそうだ。

練習の中で、最善の努力はしてきたつもりの子も子どもたちが、対外試合の中でもっと強いチームや良い動きをするチームに影響されて、自主的に練習を始めていた。より多くの人と交流することで子どもたちもさらに視野が広がり、さらに一生懸命スポーツに取り組むようになっていくだろう。



写真3-1 全国小学生タグラグビー選手権大会にて

イ 友だちと仲良く運動すること

はじめの実態

- 学校長は、6年生が一生懸命しない面があり、そういう面を何とかしたいと話していた。
- 「おれサッカーはあんまり好きやない。」と言い、投げやりにゲームに参加する子がいた。
- 片付けをしている子に、みんなで片付けているか尋ねると、「片付けている人とぜんぜん片付けない人がいる」「きれいにたたんで返す人もいるが、そのまま置いていく人もいる。」と小さな声で言うが、非難するというよりあきらめているという感じであった。
- 昨年度も同じ子がいつも用具を片付けていたので「自分からみんなのためにしようと思っているの？」と聞くとはじめは「そうだ」と言っていた子も「本当はしたくない」と言った後「みんなには言わないでほしい」と言ったらしい。
- 準備や片付けで、指導者について何往復もする子と遊んでいる子がいる。
- 部長が、力が均等になるようにチームを分けてきたが、周囲からいろいろ言われるうちにじゃんけんになってしまった。

研究協力校の子どもたちの実態に、当初から苦手意識をもつ子どもへの冷たい声かけや態度はなかったが、準備や片付けなどが特定の子どもに偏っていたり、種目の好き嫌いによっていい加減な取組になったりする様子がみられた。

真面目な子が損をするような人間関係では、子どもたちは力いっぱい運動を楽しめない。

指導者のかかわりと子どもの変容

- 指導者は反省会で、友だちのできていないことを言う子には、どうするべきだったかを尋ね、次はその子にも意識するように声かけをした。
- 指導者は、9月以降子どもたちの先頭に立って活動内容はもちろん、約束やルールについても徹底させていこうとしていた。するとこれまでは意見が出るのがあまりなかった反省会で、複数の子どもが意見を言うようになってきた。
- 指導者が片付けのいい加減な子に声をかけた。「君がいい加減なことをしたときにみんな気を使っているのがわかるか？君がどう動くかで、雰囲気が変わるんやけどなあ。」別の指導者が反省会で、きれいに片付いた道具をみんなに見せる。「厳しいことを言うようだが、片付けも含めていい加減な人がいる。ちゃんとやることをやらなければならない。」

- 指導者の指示がはっきりしているのも、子どもたちは迷わず試合を開始する。審判も交代です。試合の待ち時間の行動について指示があったため、遊んでいる子はほとんどいない。
- 6年生の決勝は、追いついてデュースとなる接戦。その頃には他の指導者だけではなく、子どもたちもかなり集まり、応援も多くなる。二人も真剣な表情で試合をする。なかなかの好ゲームで、一進一退の末、勝負がついた。
- 反省会で指導者は「今日の部活動が楽しかった人。」と尋ねた。すると全員が挙手した。「野球の得意な人が、野球の苦手な人に教えていたのがよかった。ルールを知らない人にランナーコーチとしてついてあげたのもよかったね。」

子どもが友だちと仲良くスポーツを楽しむためには、人間関係への働きかけが欠かせない。そのためには、学級経営と同じで、指導者が正しいこと間違っていることをしっかり舵取りすることが大切である。子どもたちには指導者はちゃんと見てくれているという安心感・信頼感が必要である。その繰り返しの中で、次には、子どもが自分から動こうとするようになる。

部活動で顔を合わせる程度のかかわりでは、人間関係が全て良好であることの方が稀であると思われる。子どもの自主的な活動を重視するあまり、指導者のかかわりが少なくなると、子どもの活動が停滞してしまうことがありえる。指導者が積極的にかかわっていくことが大切である。

そのようにしてできた好ましい人間関係の中ではじめて、スポーツが得意な子とそうでない子や、自己主張が強い子とそうでない子が、仲良くそれぞれが力いっぱいスポーツに取り組むことができるようになると思う。



写真3-2 王様とりの活動

(4) スポーツから離れたときの態度

スポーツは人・時間・空間が限られ、特定のルールに守られた特別な世界ではあるが、小学校で行われる部活動は、子どもの生活場面と切り離しては存在し得ない。

また、スポーツを通した子どもの健全育成を考えたとき、スポーツ活動で培った内容が子どもの人間形成に生きて働くことが望まれる。

子どものスポーツ活動では、スポーツだけしっかりできればよいのではなく、スポーツで大切にしたいエチケットやマナー、人に対する配慮を身に付けたい。そしてそれらがプレーの中でできたら、次にプレー時以外の部活動の人間関係の中でできるようにしたい。そして、それが生活全般に広がっていくことが望まれる。

育てたい子どもの姿

人に関心をもち、活動の場や生活の場が自分も人も心地良いものになるように考え、行動しようとする子ども。

はじめの実態

- もめて当然と思われる状況で、もめ事が起こらない。人間関係が固定しているようで、子どもが自分を出しにくい様子が見られる。
- 柔道と総合運動部とどちらが楽しい？
「柔道の方が楽しい。柔道は厳しい。練習をしていないときに、あんなふう（マットの上の子どもを指差し）練習をしている人を見ていないと、すごくしかられる。」
柔道の方がしかられるんやね、それでも柔道の方が楽しいの？
「楽しい」
どうしたら部活動も楽しくなるやろう？
「みんなで審判したり、教えてあげたり…」
そうしようと君がみんなに言えば？
「そんなん言えへん、はずかしい」
- 集合しよう。集まる時はボールをつかずに。
「ほんなら、ドリブルはいいの？」
なぜ、ボールをつかずにと言ったかわかるか？
「ドリブルはいいのと違うの？」
なぜ、ボールをつかずにと言ったか考えてごらん。と目を見て少しきつめに言うと言えられない。わかっていてわざと言っている。
- 指導者が試合前に子どもに指示しているが聞いていない。聞く態度をしつける必要あり。
- リレーの準備は指導者とリーダーが中心で、数人は走り回っている。

- 片付けでは指導者が「今出ている道具をみんなで協力して運びましょう」と声をかけると、全員いっせいに片付けに向かう。遊ぶ子はなし。しかし、ひとつ片付けた後で遊んでしまう子と、片付けられていないものを探してさらに片付けようとする子に分かれる。

- 女子は3人集まってしゃべっている。
「準備してるで、自分の仕事は？」と聞くと「終わったもん」。確かに自分の分担はしている。仲は良くなっていいが、逆に言うべきことが言えていない。まあ、いいかになっている。

人の気持ちを考えて行動するというのは当たり前前のことのように実行することは難しい。はじめの段階では、相手に不快な思いをさせる対応の多い子どももいるし、自分のことは素早くするが、友だちのことには無関心な子どももいる。

相手の立場に立って物事を考えるようにするためには、話をしている人がどのような気持ちで誰に何を話しているかを聞くことから始めたい。

指導者のかかわりと子どもの変容

- 今日たくさん活動できたが、なんでやろう？
「みんなが協力したから」
話を聞くときにみんながしっかり聞いていたね。だから説明を繰り返したり、途中で時間を取られたりせずに楽しい活動ができたんだね。
- 集合して体育座り、しっかり話を聞く態度ができてきている。アップのときに、先に走っていた子らが「お～い走れよ」と声をかけていた。先週末まではこのような声かけは見られなかった。
- 反省会で指導者が、6年の女子が集合するとき誰に頼まれたわけでもないのに、転がっていたボールを端に置いてから集合したこと、とても気持ちの良い行動であったことを伝えた。
- 反省会で「前回とはずいぶん違うね。みんなが気付いて協力することで、スポーツをする時間も増えるね」と話した。
- レース前に集め、準備のとき、誰といたか、仲の良い友だちと一緒にいなかったかを確認。リレーは大変盛り上がる。特に2レース目は接戦になり、走る子も係の子もしっかり集中している。いつもは30分かかかる2セットが20分ほどで終わり、片付けも早く終わる。

子ども同士の話し合いにしろ、指導者の声かけにしろ、誰かが話しているときは、その人がどんな気持ちで何を伝えようとしているのか考えながらしっかり聞く態度を身に付けたい。

そのことができてくると、子ども相互のかかわ

りが増えたり、声かけが増えたりする。友だちの様子にも気を配れるようになってくるので、協力する態度も育つ。ただし、指導者は子どもたちが気付くような声かけを続けることが必要である。

研究協力校においても、指導者は子どもたちの聞く態度が良くなかったり、活動が雑になりかけたりしたときには、活動や話を中断してでも指導をしてきた。それも「部活動に限らないよ、人の話を聞くときには話をやめてその人の方を見ながら聞くものだよ。」というように、指導者が子どもの価値観に訴え、よい習慣を促すような話をする場面を何回も見てきた。

スポーツの場面と生活の場面で大切なことが一致すること、人として大切なことはどの場面でも変わらない一般性をもつことを指摘することで子どもの活動全体が思いやりを感じられるものに変わってきたと感じた。

そして、子どもたちがそのように変容してくるにつれ、スポーツ活動も深まってきたと感じた。

(5) 人を尊重する

スポーツには、複数の人間の相互作用が多くあり、そのかかわりの中で技術を身に付けたり、競争して勝負を楽しんだりする以上、自分がかかわる人に対して尊重する気持ちがないとスポーツは成り立たない。

部活動では、スポーツが得意で人間関係にも積極的な子どももいれば、苦手意識をもち人間関係に消極的な子どももいるであろう。指導者にしても様々な指導者がいるはずである。そのような多様な人間関係の中で行う小学校の部活動であればこそ「誰に対しても同じ態度で」接することが求められる。

また、人を尊重するには自分が尊重される経験をもつことが欠かせない。人に認められる経験をするので、次に子どもは人を認め尊重する子どもに育つであろう。そのために「誉めることとしかること」のタイミングとバランスを考えたい。

育てたい子どもの姿

自分がかかわる全ての人に、思いやりをもってかかわろうとし、友だちや指導者と共にスポーツを通して人間的に成長しようとする子ども。

ア 誰に対しても同じ態度で

はじめの実態

- 反省会で登下校の指示を6年生がする。彼が出てくるときと戻るときの他の6年生の態度に

指導の必要あり。

- 通りかかった先生が「審判もちゃんとして教えてやらな」と何回も声をかける。6年生は立とうとせずに「やってるやん」と口だけで反論し、真面目にやっている下級生の子どもに「ちゃんとやれよ、さっきから言うてるやないか」と冷やかしの声かけをする。違う指導者が入ってきたからはそういう行動はほぼなくなり、逆に6年生が跳び箱で休憩する時間が増えた。
- 担当の指導者が、他の指導者が作ったメニューを使って練習をすることを伝えると「ええ～！なんで」と高学年が不満を言う。部活動をなんやと思っているの？「遊び」

スポーツやから、練習もしてうまくなったら試合ももっと楽しくなるよ。
「そんなんボールが足りないしできない」
子どもの力関係が固定化し、人間関係も固定化すると、思ったことが言えなくなったり、公正公平なかかわりが失われたりする。指導者は気付いたことをしっかり指導することと共に、好ましいかかわりをした子どもや、がんばった子どもを紹介し、みんなで認めることもしていきたい。

また、子どもは指導者によって態度を変えることがある。教職員全員でかかわることが増えてきた部活動では、指導者が変わっても活動できることが望まれるし、そのような子どもの人間的成長こそが健全育成の目的の一つであると考え。子どもが人により態度を変えたときには、毅然とした態度でかかわっていくことが大切である。

指導者のかかわりと子どもの変容

- 育成学級の子どもが筆記用具を家に忘れる。こちらが声をかける前に、隣の子がそっと「これを使い」と貸していた。
- ラケットベースに対して苦手意識をもつ子どもがヒットを打つ。野球をしている子どもがランナーコーチにつき、進塁をアドバイス。
- うまく蹴れない子どもに指導者がアドバイスしていた。チームの友だちが一緒に付き合い根気よく見守る。次も同じように失敗すると、「先生が教えてくれたやろ、そのとおりで蹴ったらいいな」と優しく声をかけていた。
- 反省会で、跳び箱が苦手な二人の練習成果を皆に紹介する。一人目が力強く踏み切ると自然に拍手がわく。二人目が跳んだ後にも拍手がわく。「二人が今日がんばった量はすごいね。」と二人の一生懸命な努力を評価し皆で認めた。

前述のような例は全体に紹介し、好ましいかわりを広げる手立てとしてきた。最後の例の二人は、跳び箱への苦手意識が強く最も気になっていた子どもであるとともに、最もできるようになる楽しさを味あわせてやりたい子どもであった。

活動の中で、子どもたちの目には留まりにくい苦手意識をもつ子のがんばりにスポットを当てることで、苦手意識をもつ子どもにとっては、運動で友だちに認められる経験をさせることができ、得意な子に対してもマンネリにならず、さらに一生懸命しようと動機づけることができる。

研究協力校2校の子どもたちは、指導者とともに試行錯誤しながら、人間関係を作っていた。A小学校とB小学校では子どもの実態も違うが、ともにより良い人間関係の中でスポーツの楽しさを味わえるように変容してきた。

良い人間関係の中での楽しさ

- 6年生の陸上記録会の練習に、運動場を譲ったため、終了5分前からサッカーを始める。時間がなく、全面1コートで全員入ったので、ボールに触れない子が多くなると思っていたが、次第に活発に動き始める。
- 女子3人も始めは手をつないでいたが、まず二人がボールを追いかけだし、最後までゴール前を離れなかった子も、ついに笑顔でボールを追いかけだし、ゴール前を離れる。
- 反省会で指導者が「楽しかったですか？」と聞くと、多くの子どもが息を弾ませながら、笑顔でうなずく。
- 指導者は「転校してきた友だちが、笑顔で活動しているのがよかった。これからも周囲の人の様子を少し意識しよう」と声をかける。

20名にボール一つ、ルールもいい加減な状態でのサッカーであった。体育学習では考えられない活動であり、ボールに触った回数を数えるとかなりの個人差があったであろうが、子どもたちは全員息が切れるまで走り回り、満足していた。反省会に集まったときの子どもたちの笑顔が証拠である。

指導者と「昔の放課後の運動場はあんな様子やったなあ！」と振り返り、「子どもは細かいルールから解き放たれて走り回っていた。勝ち負けもあまり考えていなかったのでは」と話し合う。

ただし、子どもたちの人間関係が良い状態なので成立した活動であると考えられ、子どもたちはサッカーそのものの楽しさではなく、心を許せる友だちとともに体を動かすことの楽しさを全身に感じていたのではないかと思われた。

イ 誉めることと叱ること

ここまで指導者がしっかりかかわっていくことで子どもたちの活動が活性化していくことを多く述べてきた。そのかわりの中に「誉めることと叱ること」も入ってくるはずである。

「誉めて育てる」ことは正しいことであろう。しかし、子どもに正しくないことは正しくないことを教えたり、より価値のあることを伝えたりすることはとても大切なことである。当然「叱る」場面もあるであろうし、「教える」「価値を伝える」「考えさせる」のような指導の場面も出てくるであろう。

指導者のかかわり

- 「おい、一緒に組もう。」と仲の良い友だちを誘い、ボールをもってさっさと練習に行ってしまう。残った3～4人の子が相手を探せずに困っている。指導者が全員を集めて「さっきの行動は6年生の行動としては無責任やな。後に残った子らは困っていたで。全員が二人組になるまで責任もってしてくれるか。」とその子の行動を指摘しだすと、周囲の子が静まり返り指導者に注目しているのがよくわかった。
- そのとき他の子どもたちは「先生は何を言うのだろう」という顔つきで静かに、食い入るように指導者を見ていたことが印象的であった。

うまく自己主張をできなかつたり、意見を言えなかつたりする子どもの代弁者として、まず、指導者がはっきり意見を言うことは、がんばっている子どもたちを認めることと、子どもたちにこのように行動してほしいという方向性を示すためにも大切なことである。

その後の彼の様子は素晴らしかった。全員が二人組になるまでしっかりと話し合いを進め、練習の中では友だちに声をかけていた。試合になってもワンマンではあるが、みんなに声をかけて一生懸命プレーしていた。始めも終わりもみんなを並ばせて、大きな声で挨拶の声かけをしていた。以下は練習終了後の彼との話の一部である。

今日、はじめに君は名指しで叱られたけど、後はしっかりやってくれたなあ。どんなことを思ったんかな？

「言われたようにやってみようと思った。」
ハナマルやったで、特にみんなに声をかけながらやっていたところがよかったなあ。2時間何も言われなくてもがんばり続けたやろ。君は力もってる子なんやなあ。これからもその調子で頼むで。
「うん」

課題をもつ子どもに対して、直さなければならぬことはしっかり指導するとともに、できたこと、よいことはしっかり誉めることで、子どもたちは、認められることのうれしさと共に、自分が変わっていく自己実現の楽しさを感じることができると思われる。以下はその後の彼の記録である。

- 駅伝の練習で4周までペースを維持、その後もいい加減な走りはしない。彼に直接「今日の君はこれまでで一番がんばっているなあ。これまでは抜かされたり、差がついたりしたらいい加減になっていたのに」と伝える。
- 担任に彼のがんばりを報告。彼は外見と違い傷つきやすい子だが、周囲の子にはわからないので、叱ることと認めることを上手くやっていくことで一致した。

この記録をとったあたりから、駅伝の練習は全て彼に任せているということだった。彼にとっても信頼されていることが伝わりさらに良い効果を生んでいると思われる。課題をもつ子どもも尊重されるべき対象である。課題を克服していくことが、その子の育ちにおいてとても大切になる。指導者としてしっかり支援していきたい。

子どもから意見が出にくかった反省会で、友だちのがんばりに気付いた意見などが多くでるようになった。また、スポーツに苦手意識をもつ子どもへの、子どもたちの好ましいかわりがよく見られるようになった。これらの変容も、子どもたちが活動を通して、人間関係が変わってきたことを肌で感じているからではないかと思われる。

スポーツマンシップとは、「一言で言えば尊重(respect)することである」(61)といわれている。相手を尊重し、友だちを尊重し、ルールを尊重することであり、スポーツそのものを尊重することである。これまで述べてきた「ルールを守る」「フェアプレー」「最善の努力をする」「スポーツから離れたときの態度」の内容は最後の「人を尊重する」に収束するといってよい。さらに言い換えれば「人を大切にするスポーツ活動」である。

指導者のかかわりと子どもたちの気付きの中で「人を大切にするスポーツ活動」が行われ、子どもが育っていくことで、少しずつ本当の意味での自主的な運営にしていけるのではないだろうか。

(62) 竹之下休蔵『プレイ・スポーツ・体育論』大修館書店 1972. 10 p. 215

(63) 前掲(1) pp. 178~179

第3節 総合運動部の取組から見てきたもの

(1) 総合運動部でできる活動

今年度の研究協力校2校で取り組んでいただいた種目や運動は以下の通りである。

A小学校

- ・ハンドテニス
- ・卓球
- ・サッカー
- ・陸上
- ・タグラグビー

B小学校

- ・様々なボール運動
- ・走に関するドリル練習
- ・リレー
- ・跳び箱運動
- ・体ほぐしの運動
- ・王様とり
- ・タグラグビー
- ・(水遊び)

これらの活動や昨年度の聞き取り調査を元にして、総合運動部として取り組むことができる活動を以下にまとめた。

活動例

1. 中学校へつながる競技種目
2. シーズンスポーツ
3. 体育学習の延長線上の活動
(体ほぐしの運動や表現運動などを含む)
4. 昔の遊びなど、外遊びを含む活動
5. 複数の部活動への参加が可能な活動日程を組み、結果として複数種目が経験できるもの

学校や地域の実態に合わせて、様々な種目や活動形態が考えられ、総合運動部の活動はこうでなければならないというものはないと考える。今年度の取組にしても、A小学校とB小学校の子ども、指導者、教職員、体育施設などの環境によって工夫された活動であり、どの小学校でもそのまま取り入れることができるものではない。

むしろ、子どもの現状と人的、物的環境を考慮して指導者の創意工夫があれば、各学校や地域の実態に応じた、限らない取組の例が考えられるといえるのではないだろうか。

(2) 多種目を経験するもう一つの意味

小学校期の子どもが、その運動経験において早期に一つの運動種目に偏るのではなく様々な運動を経験する必要があることは、第1章第2節第3項で述べたとおりである。また、子どもの方からみても、一つの種目に絞らず様々な運動をしたいという気持ちをもつ子が半数ほどいることを第2章第1節第1項で述べた。

今年度の実践の中で行った意識調査を通して、小学校期の子どもが多種目を経験する意味は、体力・運動能力の発達の適時性やバランス、子どもたちの嗜好に應えるという意味だけではないのではないと思われることが出てきた。第1回意識調査（6月に実施）と第2回意識調査（11月に実施）の結果を比べてみる。

問5は、できない技や動きも、やればできるか尋ねた設問である（図3-1、図3-2）。

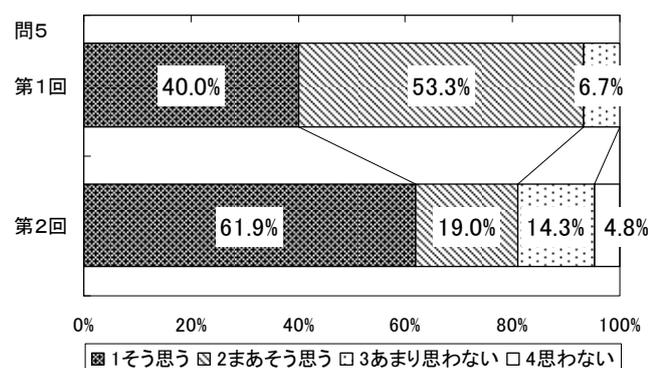


図3-1 やればできるか(A小学校)

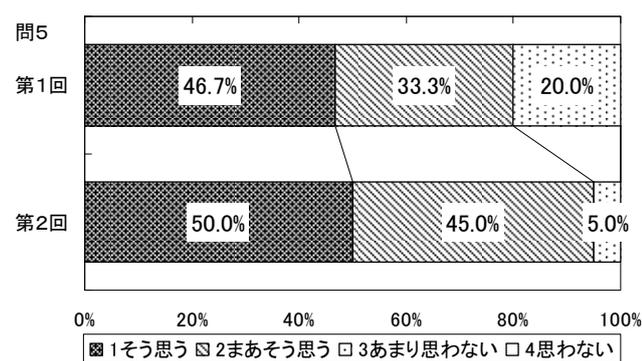


図3-2 やればできるか(B小学校)

A小学校では、「そう思う」と答えた子どもの割合は21.9%増えているが、「まあそう思う」の割合は34.3%減り、1と2の合計の割合は減っている。しかも「あまり思わない」と1回目にはなかった「思わない」が少し増えている。

B小学校では、「そう思う」と答えた子どもの割

合が3.3%増え、「まあそう思う」の割合は11.7%増えている。結果として3と4の合計は15%減っている。

2校とも標本数が20名程度であるため、統計的な意味のあるデータであるとは言いきれないが、A小学校では「やればできる」と強く思える子どもが増えた反面、あまり思えない子どももいること、B小学校では「やればできる」と感じている子どもが少しずつ増えてきていることは傾向として読み取れると思われる。

第2回の意識調査の前は、A小学校では9月から集団のスポーツである「タグラグビー」に取り組み、B小学校では11月の4回は個人のスポーツである「跳び箱運動」に取り組んでいた。

A小学校では、集団のスポーツである「タグラグビー」の中で「やればできる」と強く思える子どもが増えたが、集団の中で自分自身の力にまだ自信をもてない子どもがいるのかもしれない。

B小学校では、個人のスポーツである「跳び箱運動」に取り組む中で一人一人が少しずつ自分の力に自信をもち、「やればできる」気持ちが育ってきたのかもしれない。

問6は、できない技や動きも今の仲間とならばやればできるか尋ねた設問である（図3-3、図3-4）。

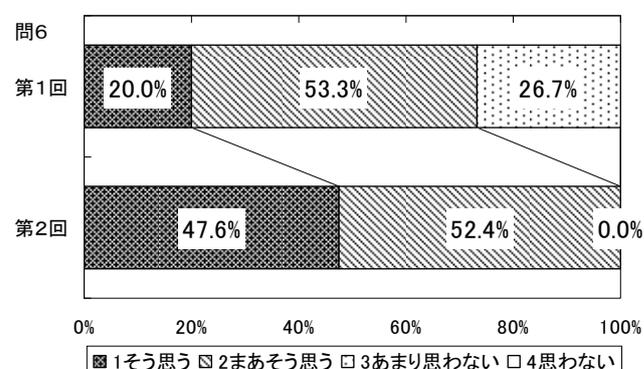


図3-3 今の仲間とならばやればできるか(A小学校)

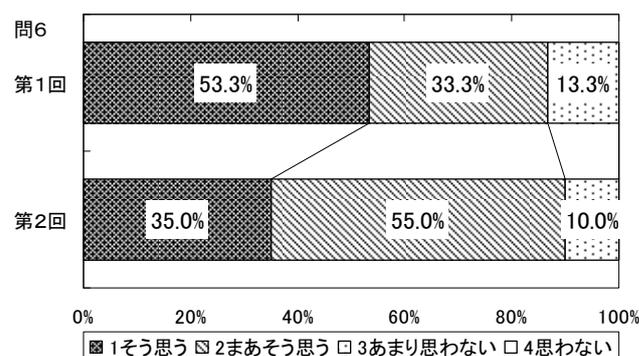


図3-4 今の仲間とならばやればできるか(B小学校)

A小学校では、「そう思う」と答えた子どもの割合は27.6%増えている。「まあそう思う」の割合はほとんど変わらずに、3と4は0%になった。

B小学校では、「そう思う」と答えた子どもの割合は18.3%減ったが、「まあそう思う」と答えた割合が21.7%増えたために、1と2の合計の割合は3.3%増えている。

A小学校では、子どもたち全員が総合運動部の仲間を肯定的に受け止めていることがわかる。

B小学校では仲間を肯定的に受け止めている傾向は増しているが、大きな変化はないようにみえる。

「やればできる」気持ちを尋ねた問5と、仲間に対する意識を尋ねた問6とを比べると、個人のスポーツである「跳び箱運動」に取り組んだB小学校では、「やればできる」気持ちがより大きく育ち、集団のスポーツである「タグラグビー」に取り組んだA小学校では、仲間を肯定的に受け止める気持ちがより大きく育ったと言えるのではないだろうか。

つまり、経験する種目によって、子どもに育つものが違うのではないかということである。

そうであるならば、人間形成の大切な段階にある小学校期の子どもたちにとって、体力・運動能力の発達段階やバランスの面や、自分に合った種目を探すという興味・関心の面ばかりでなく、子どもの育ちの面からも多種目を経験できる総合運動部の取組の大切さが強調されることになる。

(3) 成果と課題

総合運動部の取組を通して得られた成果をまとめてみる。

- 部活動の種目決定の際、子どもはその時点での興味・関心や、友だちをはじめとする周囲の人間関係の中で種目を選ぶことが多いが、様々な種目を経験することでスポーツの世界が広がり、中学以降の種目選択の際に、その種目のイメージや実感をもって決定できる種目を増やすことができる。
- 小規模校では、指導者の数や活動場所の問題で設置できる部活動の種目が限定されることが多いが、総合運動部であれば子どもたちに多くの種目を経験させることができる。
- 苦手意識をもち、これまで避けていた種目に取り組む中で、できなかったことができるようになる経験を通して、苦手意識をなくしたり、小さくしたりすることができる。

- 体育科の学習や外遊びの延長の活動を取り入れることで、指導者に専門的な指導技術が少ないことがデメリットになりにくい。
- いくつかの種目の支部交流会や全市交流会、各種大会に向けて練習することで、子どもの活動意欲を引き出し続けることができる。
- 気候（シーズン）や天候を利用した活動を取り入れることで、より地域の特色を反映した活動ができたり、天候に左右されずに臨機応変に活動を続けたりすることができる。
- 競技種目に限らないことで、より多くの学年が一緒に活動することができたり、縦の人間関係を促進することができる。

以上の成果が挙げられるが、何よりも強調しておきたいことは、様々な種目や運動の経験が、子どもの育ちにも良い影響を与えるらしいことがわかったことである。

今後の課題としては、現在ある部活動の種目のほかに総合運動部を設置するには、人や場、用具などの条件で難しい学校も多いと考えられ、部活動の組織を再編したり、地域の協力をお願いしたりすることで解決していく必要があるだろう。

研究協力校の実践を通して、最も強く感じたことは、総合運動部で何を実践するかよりも、どのように実践するかの方が、子どもたちにとってはるかに大切であるということである。

子どもの興味・関心を尊重しようと思うあまり計画性がなくなってしまったり、苦手意識をもつ子どもが目立たないようにしようとするあまり指導がなくなって活動だけになってしまったりしては、スポーツ活動が子どもたちにとって意味のある活動にならなくなってしまふ恐れがある。

A小学校では、指導者が小規模校である特性から、子どもたちの人間関係が狭く、固定しがちであることを問題意識としてもち、子どもたちの意識を外の世界に向けるために、交流会を利用しようと考えた。そのために年間計画を立て活動すると共に、子どもたちがスポーツに集中できるように、ルールを守ることや人間関係を改善することに常に暖かく徹底的・継続的に働きかけ続けた。

B小学校では、指導者が運動の得意な子どもと、苦手意識をもつ子どもと一緒に活動することを考慮し、当初から人間関係にしっかりと働きかけようとしていた。実験的に様々な種目や運動に取り組んでいただいたが、どのような活動であろうと、しっかり話を聞くことや、準備・片付けまでみんなですること、新しく入ってきた友だちへ配

慮することなどを常に子どもたちに働きかけ続けていた。

研究協力校2校の子どもたちの様子が、実践が進むとともに変容し、人間関係が改善していくにつれて、運動自体も深まり、全ての参加した子どもが楽しめるものになっていったことを本章第2節で報告できることは幸せである。

しかし、研究協力校の指導者も子どもたちも試行錯誤の毎日であったことを付け加えたい。総合運動部に限らず、このような子どものための試行錯誤を続けていくことこそが今後の課題である。

第4章 生涯スポーツの基礎を育むために

第1節 スポーツを大切に思う子どもを育てるために

(1) 有能感にかかわる意識

第2章第2節第2項で述べたように、子どもが運動・スポーツを経験する中で“有能感”をもつことで自分が成長していく自己実現の“楽しさ”を感じる事が大切であると考えたために、「有能感」「価値」「関係性」をキーワードに6月と11月に子どもたちの意識調査を行った。

表4-1と表4-2は、20問の設定問を三つのキーワードにかかわる内容ごとに4点満点で集計したものである。さらに、0.2ポイント以上の上昇が見られた部分に色をつけた。他の部分は0.1ポイントの増減であった。標本数を考えると大きな変化があったとは考えられない。

A小学校では「自己にかかわるもの」の領域の「価値」が0.3ポイント上昇したこと、「集団の広がりにかかわるもの」の「有能感」が0.6ポイント上昇している。

「集団の広がりにかかわるもの」の「有能感」については「今の仲間とならばやればできると思うか」という一問だけであるため、スポーツにおける子どもたち各自の価値のポイントの上昇と共に、仲間の支えやかかわりの深まりを強く感じている子どもが増えているのではないかと考えられる。このことは第3章第2節を通じて、子どもたちがスポーツにおいても人間関係が大切であるということを少しずつ身に付けていった過程と、それに合わせて子ども相互のかかわりが増え、活動の様相が変わってきたことに重なる。

表4-1 キーワードによる意識調査集計(A小学校)

A小	自己にかかわるもの		集団の広がりにかかわるもの	
	第1回	第2回	第1回	第2回
有能感	3.2	3.1	2.9	3.5
価値	3.2	3.5	2.9	3.0
関係性	3.1	3.0	3.0	2.9

表4-2 キーワードによる意識調査集計(B小学校)

B小	自己にかかわるもの		集団の広がりにかかわるもの	
	第1回	第2回	第1回	第2回
有能感	3.2	3.3	3.4	3.3
価値	3.3	3.3	3.3	3.2
関係性	3.2	3.1	2.8	3.3

B小学校では「集団の広がりにかかわるもの」の「関係性」が0.5ポイント上昇している。

活動が進むにつれて、子どもたち相互や指導者とのかかわりが増して、子どもたちが友だちや指導者との関係をより意識するようになっていけると考えられる。このことは、第3章第1節で述べた年度当初の子どもの実態や、第3章第2節の取組の中でも述べた内容と重なる。活動開始当初は、子どもたちがお互いに関心を寄せてかかわり合うことは少なく、指導者も活動を子どもの自主性に任せるべきか迷いがあったために、子どもたちにまとまりがなかった。しかし、指導者が子どもに積極的にかかわりだし、子ども相互のかかわりが増えるような働きかけやまとめをし始めると共に、活動の様子が変容し始めた。

半年余りの実践の中で、子どもたちの活動の様子と意識が変容するか不安があったが、研究協力員の方々の努力と子どもたちのがんばりで活動の様子は飛躍的に改善してきた。

そのことが上記のような意識調査の結果にも反映されてきたと考える。ただし、「自己にかかわるもの」の領域の「有能感」のポイントは2校とも大きな変化を見せていない。スポーツの“楽しさ”を感じるために子どもたちに“有能感”をもたせることが大切なのではないかと考えたが、意識調査には有能感のポイントの上昇が出ていない。

しかし、2校の子どもたちは確実にスポーツを楽しむことができるようになったように見える。このことは、活動期間がまだ短いということも関係しているかもしれないが、必ずしも「有能感」が高まらなくても、「価値」や「関係性」のポイントが上がることで、子どもたちはスポーツを楽しむことができるということを示唆しているのかもしれない。

この点を考察するために、意識調査の結果をもう少し詳しくみていくことにする。

表4-3 ポイントによる意識調査集計(A小学校)

A小	自己にかかわるもの		集団の広がりにかかわるもの		
	第1回	第2回	第1回	第2回	
有能感	スポーツは得意か	3.0	2.9		
	やればできると思うか	3.3	3.4	今の仲間とならやればできると思うか	2.9 3.5
価値	スポーツは好きか	3.6	3.8	部活動が楽しみか	3.3 3.3
	力いっぱい活動しているか	3.3	3.6	どの子ども力いっぱい活動しているか	2.9 2.9
	あいさつや言葉遣いに気をつけているか	2.8	3.2	どの子どもあいさつや言葉遣いに気をつけているか	2.5 2.7
	約束やルールを守っているか	3.6	3.6	どの子ども約束やルールを守っているか	2.9 3.2
関係性	しんどいこともすすんでしているか	2.7	3.1	しんどいこともみんなですでしているか	2.7 3.1
				友だちはできたか	2.8 2.5
	友だちに声をかけているか	2.8	2.6	友だちから声をかけられるか	3.0 2.8
	指導者に相談に行くか	2.7	2.6	指導者の声かけはあるか	2.8 3.2
			友だちや指導者との関係を大切にしているか	3.2 3.2	

(2) 価値を共有する営み

表4-3と次頁表4-4は、設問ごとに4点満点でポイントを集計したものである。うすく色付けた部分は0.2ポイント上昇した設問、濃く色付けした部分は0.3ポイント以上上昇した設問である。

前項においてA小学校に特徴的なことは「自己にかかわるもの」の領域の「価値」のポイントの上昇であった。しかし、表4-3を設問ごとに見てみると、「集団の広がりにかかわるもの」の領域の「価値」のポイントも顕著に上昇していることがわかる。

第3章第1節で述べてきたように、A小学校は小規模校であるために子どもたちの人間関係が固定的になる傾向があり、その人間関係がそのまま総合運動部の活動にも影響していることが窺われた。

特に全学年が部活動に参加しているA小学校では、ルールやマナー面がしっかり身に付いていることや、準備や片付け、審判などを高学年の子どもを中心にみんなで協力してすることは、子どもが安心して運動をするための前提条件であるが、当初は課題を感じる場面が多く見られた。

人間関係も中学年以上では自分のしたいようにする子どもの様子と気兼ねする子どもの様子とが見られ、子どもたちが心からスポーツを楽しんでいる様子が少ないように感じられた。これは、学校外でも活発にスポーツに参加している6年生にしても同様で、子どもたちが現状に満足していないことが窺われた。

上記のような課題に対して指導者は試行錯誤しながらも、子どもたちにルールを知り守ることの大切さを伝え、間違っていることは正し、良いことは誉めることを繰り返し、指導者や友だちの話聞くことから指導していった(第3章第2節)。

その中で子どもたちの活動の様子が少しずつ変容していった。夏休み前はその日の指導者によ

て子どもたちの態度や活動の様子が違うという課題も見られたが、少しずつ子ども相互のかかわりが増えたり、反省会での発言が増えたりしてきた。

2回目の意識調査を行った11月頃には、タグラグビーの大会で子どもたちが成長した姿をみせてくれただけでなく、普段の練習の様子も子どもたち一人一人がスポーツを楽しんでいる様子が表情からも見て取れるようになった。11月13日の反省会では、指導者が子どもたちのがんばりを例に挙げた後に、「これがクラブやで」と感慨深く話すまでになった。

A小学校の子どもたちの活動経過と意識調査結果を見ると、子ども個人の中に調査項目のような「価値」がなかったわけではなく、指導者がその「価値」は値打ちのあるものであると子どもにしっかり示すことで、子どもは自信をもって行動に移せるようになっていったと思われる。そしてお互いの成長に気付いたときに、安心して力いっぱい運動できる人的な環境が整い、「今の仲間とならばやればできる」気持ちを強くしていったと考ええる。

すなわち、A小学校の子どもたちはそれぞれが潜在的にもっていた「価値」をスポーツ活動を通して共有し、互いに認め合う中で、安心して力いっぱい運動できるようになっていったと言えるのではないかと。その結果、現在のところ「自己にかかわるもの」の領域の「有能感」についてはポイントの上昇はあまり見られないが、子どもたちはスポーツをすることの意味を自らの中に見い出し、「スポーツは好きか」のポイントが3.8まで上昇したのではないだろうか。小学生スポーツにおいて、「価値」に対する指導者の働きかけが重要であることを再認識させられる実践となった。

付け加えておくと、A小学校の指導者は、価値についての働きかけだけをしていただけでは

表4-4 ポイントによる意識調査集計(B小学校)

B小	自己にかかわるもの		集団の広がりにかかわるもの		
	第1回	第2回	第1回	第2回	
有能感	スポーツは得意か	3.1	3.1		
	やればできると思うか	3.3	3.5	今の仲間とならやればできると思うか	3.4 3.3
価値	スポーツは好きか	3.7	4.0	部活動が楽しみか	3.7 3.6
	力いっぱい活動しているか	3.4	3.6	どの子も力いっぱい活動しているか	3.5 3.3
	あいさつや言葉遣いに気をつけているか	3.0	2.9	どの子もあいさつや言葉遣いに気をつけているか	3.1 3.0
	約束やルールを守っているか	3.7	3.2	どの子も約束やルールを守っているか	3.3 3.0
	しんどいこともすすんでしているか	2.9	2.9	しんどいこともみんなですでしているか	3.1 3.3
関係性				友だちはできたか	2.5 3.4
	友だちに声をかけているか	2.5	2.7	友だちから声をかけられるか	2.7 3.1
	指導者に相談に行くか	3.0	3.0	指導者の声かけはあるか	2.7 3.1
	友だちや指導者との関係を大切にしているか	3.9	3.8	仲間は友だちや先生との関係を大切にしているか	3.3 3.6

なく、子どもが「できること」の楽しさを味わえるために、様々な指導内容やルールの工夫をしていた。子どもたちが安心して力いっぱい運動できる環境が整ってきたことを考えると、今後「自己にかかわるもの」の領域の「有能感」のポイントも少しずつ高まっていくことが期待できるのではないだろうか。

(3) 関係性を構築する営み

B小学校では「集団の広がりにかかわるもの」の「関係性」について、ポイントの上昇が顕著であった。表4-4を見ると四つの設問全てで0.3ポイント以上上昇していることがわかる。特に「友だちはできたか」では今回の意識調査で最高の0.9ポイントの上昇が見られる。

第3章第2節で述べたように、子どもたちは活動当初仲の良い2～3人のグループでは話すとその周囲の友だちに対しては関心が薄かったり、指導者の話や指示もしっかり聞いていなかったり、準備や片付けをがんばっている友だちの様子も目に入らなかつたりというように人間関係が作られていない状態であった。周囲の人間のことに意識がないという状態とも言えるかもしれない。

そこで、指導者と話し合い、必要だと思われる場面では迷わず声をかけたり、指導したりすることを実践していくようにした。また子どもの実態から、人とのかかわりを考えた取組の必要性を確認し計画に反映させようと考えた。「王様とり」の活動はその一つである。

夏休みまでの活動の中で、友だちにかかわる声かけが増えるなど、すぐに人間関係は変わりだした。指導者の声かけですぐに協力して準備や片付けができるようになってきた。リレーの活動では役割分担もしっかり決め、子どもが何をしたらよいのか迷わないように配慮した。その結果、準備や片付けでの子どもの動きが好転した。

しかし、この時点では自分の分担が終われば友だちのことには気付かない様子が見られ、自分で考えて判断し、行動することができるような子どもに育てることが求められると感じた。

夏休み明けの活動では人間関係が深まり仲良くなった友だちの間で、これまでとは逆に、お互いに意見を言いにくい関係、または言わない方が心地良い関係が見られだした。

特に女子は、一人だけであった部員が4名に増えて嬉しい反面、自分の判断で動くことができている子どもが、友だちに合わせるような行動が見られるようになり、指導者が指摘しなければならぬ場面が出てきた。

10月には、跳び箱運動に取り組んだ。4回しか活動予定がなかったため、ここでは指導者が前面に出て基本的な技能を身に付けるための活動をした。この4回の取組では指導者と子どもの直接的なかわりが多かったが、苦手意識をもつ子どもに多くかかわり全員に紹介することで、得意な子どももさらに全力で活動するようになり、子ども同士の気付きやかかわりが増えた。

また、高学年の女子には一生懸命さに対して冷めた感覚の子どももいたが、なんとなく一生懸命取り組むことから逃げたそうにしていたその子どもにかかわり、跳べるようになることで進んで跳び箱に挑戦するようになった。何よりも表情が明るくなり、指導者と話をする際もまっすぐに目を見て話せるようになってきた。

指導者の子どもへの積極的なかわりが指導者と子どもの関係を深めるだけでなく、子ども同士の関係も深め、子どもたちが気兼ねなく自分を出し、力いっぱい運動するようになってきたと言える。もちろん、その過程では試行錯誤や、葛藤があり子どもの様子は行きつ戻りつするが、指導者の適切な支援で子どもたちはその都度考えながら乗り越えてきた。B小学校の子どもたちの「集団

の広がりにかかわるもの」の「関係性」のポイントが上昇したことは活動の経過から納得できるものであり、「友だちや指導者との関係を大切にしながら」活動してきた結果であると考えられる。

このように人間関係が築かれてきた子どもたちと「ルールを知り、ルール守ってみんなで楽しく遊ぶ」ことをめあてに「王様とり」に取り組んだ。ここでは、子どもたちが役割を知り、ルールを守り、活発に活動した。そればかりか、さらに楽しい活動にするために何回もルールの工夫のための意見を出し合い、走るのが得意な子どもも苦手な子どもも、相手も味方も共に、しかも、“全力で”ゲームを楽しもうとする様子が見て取れた。小学生のスポーツにおいて、「関係性」に対する指導者の働きかけが重要であることを改めて認識させられる実践となった。

B小学校では「自己にかかわるもの」の領域の「有能感」のポイントも上昇する傾向が見られる。これは、跳び箱運動など個人の達成がわかりやすい種目に取り組んだ結果であると思われるが、「スポーツが好きか」の設問に対して全員が「そう思う」と答え4点満点であったことが指導にかかわった者として何よりの喜びである。

2校の研究協力校の取組を通じて、運動を通して子どもたちに“有能感”をもたせるためにも、指導者はスポーツ活動の中で「価値」や「関係性」について、子どもの実態を見ながらしっかり働きかけていくことが大切であることがわかった。その中で子どもたちは、さらにスポーツを好きになることもわかった。

スポーツと出会う小学校期に、部活動でこのような体験をすることで、子どもたちはスポーツを自分の生活にとってかけがえのない大切なものにしていくはずである。

第2節 スポーツを通じた健全育成のために

(1) 教師としての専門性を生かした指導を

第1章第1節第2項で、スポーツがとりわけ青少年にとっては人間形成に多大な影響を与え、心と体の両面の発達に有効であることや、スポーツを通して現在及び将来とも楽しく明るい生活を営むための基礎づくりをすることなど、子どものスポーツについての教育的な意味について述べた。

第1章第2節では、小学生だからこそ経験させ

たい活動として、神経系が発達する時期であることを考えて、様々な運動種目を経験させたいことや、「共生」の視点を大切にして、運動が得意な子どもと苦手意識をもつ子どもが同じ活動の場で仲良く共に高め合えるような活動を求めていきたいことを述べた。

そこで本研究では、総合運動部の取組を取り上げた。第2章第1節では、子どもと指導者の両面から見た総合運動部の利点を挙げて、スポーツ少年団の指導者に比べて指導種目の経験が少ない指導者の割合が多い部活動では、総合運動部がデメリットの少ない取組となり得るとも述べた。

しかし、研究協力校での実践を通して、総合運動部を教職員が中心に指導することのメリットを積極的に捉えるべきではないかと考える。

体育学習の指導を通して、より多くの種目に接していることはもちろんであるが、前節で述べた「価値」と「関係性」に対する働きかけは、教師が日々学級経営の中で学級の子どものたちとともに取り組んでいる内容に他ならないからである。

また、「共生」の面から考えても、運動が得意な子どもと苦手意識をもつ子どもが同じ場で活動するという事は学級と同じ状況である。

細江は体育学習において「共生の可能性を導く支援としては第一に、個々の差異（仲間との共通点、相違点の認識）と競争の意味（勝ったり、負けたりするのがスポーツであり、結果が全てではないこと）についての情報を子どもたちに提供することから始まる。このような意味の情報は子どもたち自身の心の変動を促していくことになる。したがって、これらによってチーム内での感情的な対立や争いに対するゆらぎが発生し、『自分が活躍できたり、チームメンバーの気持ちを考えずに、とにかく勝つためにプレイすればそれでよいとするのか』という解消すべき矛盾を焦点化するようになる。このような新たな視点への創造（問い直しによる自省作用）によって、動的な協力現象（チーム内での技能レベルを越えた協力）が導かれていくと考える。そのプロセスには組織内外における相互作用としての「対話」が重要な役割を担うことになる。第二の支援として、このような対話を成立させるための雰囲気作りを考えていく必要がある。体験による共感意識に支えられながら、対話によってこれらの動的協力現象はますます強化されていくことになる。（中略）かくして一定の秩序が形成され、機能が遂行されていくものとする」（64）と述べている。

細江の言う第一の支援は「価値」のことであり、第二の支援は「関係性」のことであると言い換えられるのではないだろうか。A小学校とB小学校の取組では、「価値」についての働きかけと「関係性」についての働きかけをあえて別のように記述したが、両者は相互に関連しあって子どもたちの仲間への意識と活動内容を深めていくものであると考える。

教師が中心となり、総合運動部に限らず、全ての小学校部活動を学級経営と同じ感覚で経営することで、スポーツが得意な子どもと苦手意識をもつ子どもとが共に高め合い、さらにスポーツを好きになる活動が展開されるのであれば、これこそが教師としての専門性を生かした小学校部活動の指導と言えるのではないだろうか。

(2) 社会力を育み子どもに生きる取組を

最近のわが国の若者や子どもに見られる変化について、社会的人間として育っていない者が増えているのではないかと、社会性が欠如している者が増えているのではないかというような内容の論評を目にするようになった。

門脇は「いまの子どもたちにみられる変化とは、煎じ詰めれば、他人への関心と愛着と信頼感をなくしていることであり、自分がふだん生活している世界がどんなところであるかを自分の体で実感できなくなっていることではないか」(65)という見方をし、「わが国の若い人に欠けているのは社会への適応力というより、自らの意思で社会を作っていく意欲とその社会を維持し発展させていくのに必要な資質や能力である」(66)と考へ、そのような資質や能力を「**社会力**」と呼んでいる。

さらに門脇は「こうした社会力不全が生じるおおもとなっているのは、成長過程における多様な他者との相互行為不足である」(67)とし、高度成長期以後、学校生活から失われたものを「子どもたちの間の仲間意識、連帯感、つながり意識といったものであろう。一言で共同性の喪失と言うこともできよう」(68)と述べている。

スポーツを通した子どもの健全育成が、心と体の両面の発達を意図し、現在及び将来とも楽しく明るい生活を営むための基礎づくりをすることであれば、そして、「価値」と「関係性」を高めることが「楽しさ」や「有能感」につながるならば、スポーツは子どもたちが「社会力」を身に付けるために大きな力を発揮できるはずである。

そのためにも部活動、特に総合運動部の活動は、

運動に苦手意識をもつ子どもだけのためや入門期の子どもだけのための活動ではなく、多様な子どもたちが一緒に活動する場として成立させたい。

なぜならば、上達の効率を優先したり、同程度の能力をもつ子ども同士でゲームをする楽しさを優先したりするならば、子どもを能力別の同質グループに分けて活動するほうが有利であるとも考えられる。苦手意識をもつ子どももその方が気兼ねせずに活動できる場面もあるであろう。

しかし、小学校の部活動においては、子どもが優越感をもったり、劣等感をもったりすることの弊害のほうが大きいと考える。指導にはそれなりの配慮が必要であるが、異質グループで活動させることを通して、お互いの違いを理解しながら活動できる子どもを育てることが大きな意味をもつと考えるからである。

もう一点、大人になりレクリエーションとしてスポーツに参加する場合は、多様な人が集まる場であり、同質グループでの活動ということはまず有り得ないという生涯スポーツの視点からである。子どもたちが「共生」を意識したスポーツ活動をすることが、子どもたちの「社会力」を育み、普段の生活に生きて働く力となることが期待されるからである。

そのためにも多様な子どもたちが集まったスポーツの場で『人を大切にするスポーツ活動』が行われることが大切であり、「価値」と「関係性」を高めるために、エチケットやマナー、スポーツマンシップやフェアプレーの実践が必要になる。

ここで確認しておきたいことは、本章で述べてきたことはスポーツを子どもを育てる手段として利用するということではないということである。子どもたちがスポーツの楽しさに浸り、スポーツを自分にとって意味あるものとするためには、「人を大切にするスポーツ活動」が必要であるということである。さらに言えば、スポーツマンシップやフェアプレー、ルールやマナーを守ることは、スポーツがスポーツとして成立するための必要条件であるので、スポーツに出会う時期の子どもたちにこそ大切に伝えたい内容であり、仲間と共に豊かにスポーツを楽しめる子どもは、人間的にも豊かに成長しているということである。

しかし、子どもの運動遊び、体育学習や部活動をはじめ、子どもたちのスポーツ活動を見るとき、お互いにルールを守り、平等な条件の下で一生懸命競争したり、支え合って達成に向かったりする様子が見られるようになり、苦手意識をもつ子

もが積極的に活動するような集団に育てることに
は多少の困難を伴う。

なぜならば、子ども相互の人間関係はスポーツ
活動が終わった後も続くからである。特に苦手意
識をもつ子どもにとっては、運動やスポーツをし
ている間だけではなく、日常生活の中でも人間関
係が互いに認め合い支え合える関係になっている
ことが必要である。

そのために子どものスポーツ指導においては、
ルールを守ることやフェアプレーにかかわる態度
が、スポーツ活動の中だけではなく、生活の場面
に広がっていくような指導が大切である。

竹之下は「それはスポーツを単なるパスタ
イムから教育に高めることであるといっ
てよい。もしこのことがうまくいけば、
スポーツ参加者の増加という現実から、
フェアプレーの、スポーツから実生活
への浸透も可能ではないか」(69)と述
べ、スポーツの学習と一般の社会生活をつ
なぐためにフェアプレーをあらためて問
題にする必要性を提言している。

スポーツ活動を通して育った、子ども
たち相互の好ましい関係が、スポーツの
場面から生活の場面に広がっていくこ
とで、苦手意識をもつ子どもや失敗経
験の多い子どもはさらに安心してスポ
ーツに集中していけるようになるはず
である。

フェアプレーとは、「他人が見ていよう
が見ていまいが、いつでも、どこで
でも自らの信念に基づいてできる人
間らしい正しい行為・行動を意味し
たスポーツ的行為・行動」(70)であ
る。

子どもたちの人間関係が、フェアプレー
に支えられてこそ、スポーツの場で『
人を大切にするスポーツ活動』が展開
される。そこでは全ての子どもが自ら
運動・スポーツに向かい、スポーツが
生活に根付き、スポーツが子どもの人
間形成に貢献することになる。それ
こそがスポーツを通した子どもの健全
育成そのものであると考える。

(64) 前掲(39) p. 204, 205

(65) 門脇厚司『子どもの社会力』岩波書店 1999. 12 p. iii

(66) 前掲(65) p. vii

(67) 前掲(65) p. 29

(68) 前掲(65) p. 137

(69) 前掲(62) p. 216

(70) 近藤良享『スポーツ倫理の探求』大修館書店
2004. 6 p. 230

おわりに

子どもの体力・運動能力低下の問題は客観
的な事実である。スポーツに親しむ子ども
とそうでない子どもの二極化の問題も、
子どもの現状を考えると認めざるを得
ない現実である。

さらに、子どもの生活場面を見回すと、
家族の少人数化や遊びの文化の喪失、
ゲーム機やモバイル機器の普及による
人と直接コミュニケーションをとる機
会の減少などから、子どもの社会性や
コミュニケーション能力の低下、さら
には規範意識の低下までもが問題視さ
れるようになってきた。

しかし、昨年度と今年度の研究を通し
て、子どもたちは運動やスポーツが大
好きであることがわかった。スポーツ
は人と人との直接的な相互行為であ
る。そこはバーチャルな世界ではなく、
現実の、生身の人間の豊かな交流が
期待できる場所である。上記のよう
な子どもの課題を解消する手立ての
一つとして大いに期待できると考
える。

本研究においても、2校の研究協力校
の子どもたちから、子どもの人間形成
におけるスポーツの限らない可能性を
感じることができた。

第3章で「人を大切にするスポーツ活
動」について考えてきた。それらはほ
とんどがスポーツマンシップの中身と
して考えられるものであり、本来ス
ポーツの内容として大切にされるべき
ものであるが、人として社会生活を
営む上でも大切にしたい事柄であ
る。

しかし、これらは子どもがただ集ま
って、スポーツをすれば身に付くとい
うものでもない。残念なことではあ
るが、はじめの段階では昔の子ども
も集団のように、集団を仕切って子
どもなりの公正公平なかかわりを保
つボス的な存在は期待できない。大
人の確かなかかわりが必要なので
ある。

指導者が「価値」や「関係性」に対
して確実に働きかけることで、子
どもの人間関係が改善し、子ども
たちはスポーツを通して「有能感」
や「自己肯定感」を育み、スポーツ
の楽しさとかかわりの大切さに気
づく。そのようにスポーツに親しむ
子どもたちを増やすために、我々
指導者は子どもたちとともに歩ん
でゆきたい。子どもたちが「楽し
く明るい生活」を自ら創造してゆく
ために。

本研究では、六原小学校と朱雀第三
小学校の子どもたちと研究協力員の
先生方、そして両校の校長先生を
はじめ多くの教職員の方に大変お
世話になりました。この場をお借り
して感謝の意を表したいと思います。